

## 顯密二教

當時に於ける顯密二教の流行を察すべきである。但し此は朝廷に於ける佛道流行の一斑である。殊に佛道を内教と云ひ、儒道を外と云つて佛教を重んじた證とすべきである。

當時の社會人はいかに佛道を體得したかと云へば、行ひ澄す修行者よりも社界の表面に立つものゝ常識で花々しい行事となつた。「法華八講」のごときは天下の盛觀を極めたものである。又「法華供養」や「持佛供養」などの爲めに多大の物資を費して豪華の限りを盡すがごときも、蓋し當時に於ける一種の流行と謂ふべきものである。中にも當病平癒の祈禱に、名僧智識を請じて莫大の布施を吝まぬがごとき、上流社會一般の風潮であつたが、又一種修驗道の勢力には當るべからざるものがあつて、物怪調伏などは修驗者の持切りで醫者はあれどもなきがごとく、第一に召さるゝものは修驗者である。故に後までも法者といつて尊敬せられてあつた。

斯のごとく精神修養の資料となすべき佛道の本旨を却つて形式上に重きを置く傾向を循致したとはいへ。一旦我が身運命の窮するを自覺すれば、直に其の姿を變へて社會人との交際を絶ち、専心一意行ひ澄まして世に求むる事のない生活に入る者も少なくない。此の類には男子あり女子あり其の身分にも亦尊卑の別はあるが、主とする所は宿命論に因る結果であら

## 宿命論

## 修驗道

う。然しながら此のごとき人生の安全地帯が自から設けられてあつた爲に、たとひいかなる不幸不運に遭遇しても悲觀の極自殺してあたり生命を我自から捨てるものがない。今日の若い者達が自殺するものゝ多いに比べれば、當時の佛道が社會に捧げた威力は實に侮り難いものがあつたのに驚かれるものである。「御法」の卷に於ける紫の上の「法華經供養」、「鈴蟲」の卷に於ける女三宮の「持佛供養」の莊嚴は、目の覺むるばかり盛大なものであつた。紫の上が「法華經供養」は、「御法」の卷に

## 紫上の法華供養

年頃、私の御願にて、書かせ奉りける法華經千部、急ぎて供養じ給ふ。わが御殿とおぼす二條院にてぞしたまひける。七僧の法服など品々にたまはす。物の色縫目より始めて清らなること限りなし。おほかた何事もいと嚴めしき業どもをせられたり。事々しきさまにも聞え給はざりければ、委しき事ども知らせ給はざりけるに○紫の上女○源氏の御掟にはいたり深く、佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を院○源氏はいと限りなしと見奉りたまひて、ただ大方の御しつらひ、何かの事ばかりをなむ營ませ給ひける。

又女三宮の「持佛供養」の莊嚴は「鈴蟲の卷」に

夏頃、蓮の花の盛りに、入道の姫宮○女の御持佛ども、あらはしいで給へる供養せさせ

## 女三宮の持佛供養



給ふ。この度はおとこの君○源氏の御志にて、御念誦堂の具ども、細かに調べさせ給へるを、やがて、しつらはせ給ふ。幡のさまなどなつかしう、心異なる唐の錦を選び縫はせ給へり。紫の上ぞ急ぎせさせ給ひける。花机の覆ひなど、をかきめどもなつかしう、きよらなるにほひ染めつけられたる心ばえ、めなれぬさまなり。よるの御帳の帷をよおもてながらあげて、後の方に、法華のまだら懸け奉りて、白銀の花瓶に高くことごとくしき花の色を調べて奉れり。名香には、唐の百ぶの香を焚きたまへり。阿彌陀佛狹侍の菩薩、おのの白檀して造り奉りたる、細かに美しげなり。闕迦の具は、例のきはやかにちひさくて青き白き紫の蓮を調べて、荷葉の方を合せたる名香、蜜を隠しほろくけて、たき匂はしたる、ひとつ薫に匂ひ合ひて、いとなつかし。經は六道の衆生のために、六部書かせ給ひてみづからの御持經は、院ぞ御手づから書かせ給ひける。これをだに、この世の結縁にて、かたみにみちびきかはし給ふべき心を、願文につくらせ給へり。さては阿彌陀經、唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにも、いかゞとて、紙屋の人を召して、殊に仰言たまひて心ことに清らに漉かせ給へるに、この春の頃ほひより、御心とめて、急ぎ書かせ給へるかひありて、端を見給ふ人々、目も輝き惑ひ給ふ。卦ウラかけたる金の筋カネよりも、墨つぎの上

に輝くさまなども、いとなむめづらかなりける。軸、表紙の箱のさまなど、いへば愚なりかし。これは殊に沈の花足ヒツクの机に据ゑて、佛の同じ帳臺の上に飾られ給へり。堂飾り果てて、講師まうのぼり、行道の人々参り集ひ給へば、院もあなたに出で給ふとて、宮のおはします西の廂に、さしのぞき給へれば、狭き心地する假の御しつらひに、所せくあつげなるまで、ことごとくしく装束きたる女房五六十人ばかり集ひたり、北の廂の簀の子まで童べなどはさまよふ。火取どもあまたして、けぶたきまであふぎちらせば、さしより給ひて、そらに焼くはいづくの烟ぞと思ひわかれぬこそよけれ、富士の峰より、けにくゆり満ち出でたるは本意なき業なり。講説の折は、大方の鳴りを静めて、のどかに物の心も聞き分くべき事なれば、憚なき衣の音なひ、人のけはひ静めてなむよかるべきな」と例の物深からぬ若人どもの用意をしへ給ふ。○下

又「若菜」の巻に見えたる祈禱の状況は

優れたる驗者共の限り召し集めて、限りある御命○紫の上にて、此の世盡き給ひぬとも、只今しばしのどめ給へ、不動尊の御もとの誓あり、其の日數をだに、かけとめて奉り給へと、頭○源氏よりまことに黒烟を立て、いみじき心をおこして加持し奉る。院○源氏も只今一



度目を見合せ給へ、いとあへなくかぎりなりつらむ程をだに、え見ずなりにけることの悔しく悲しきをと、おぼし惑へるさま、とまり給ふべきにもあらぬを、見奉るこゝちもただおしはかるべし。

失意の境にあつて念佛三昧に暮された源氏の君の異母弟八宮の生涯のごときは實に悲惨なものであつた。是蓋し當時たとひ特別な身柄のものも、たしかなる後援のないものは失意に終るものがあつた社會相のある一面を描寫したものであらう。「橋姫」の卷に八宮の生活を敍したのは

## 八宮の失意

その頃、世にかずまへられ給はぬ古宮おはしけり。母方などもやむごとなく物し給ひて筋殊なるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられ給ひける紛れに、なか／＼いと名残なく、御後見なども物うらめしき心々にて、方々につけて世を背き去りつゝ公私により所なく、さし放たれ給へるやうなり。北の方も昔の大臣の御女なりける。あはれに心細く、親達の思しおきてたりし様など思ひ出で給ふに、たとしへなきことおほかれど、深き御契の二つなきばかりを憂世のなぐさめにて、かたみに又なくたのみかはしたまへり。

## 八宮の道才

又八宮の道才優れておはしますことは、同じ卷に

山重れる御住居に尋ね参る人もなし。あやしき下衆など、田舎びたる山賤どものみ、稀に馴れ参り仕うまつる。峰の朝霧晴るゝ折なくて、明かし暮し給ふに、この宇治山に聖だちたる阿闍梨住みけり。才いと賢くて、世の覺も輕からねど、をさ／＼公事にも出で仕へずなどして籠り居たるに、この宮かく近き程に住み給ひて、寂しき御様にたふとき業をせさせ給ひつゝ、法文などを讀み習ひ給へば、尊がりきこえて常に参る。年頃學び知り給へる事どもの、深き心を解ききかせ奉り、いよ／＼この世のかりそめにあぢきなき事を申し知らずれば、「心ばかり蓮のうへに思ひ上り、濁なき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人を見捨てむ後めたさばかりになむえひたみちにも形をかへぬ」など隔なく物語し給ふ。この阿闍梨は冷泉院にも親しく侍ひて、御經など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例のさるべき文など御覽じて問はせ給ふことどもあるついでに、八の宮のいと賢く内教の御才さとり深く物し給ひけるを、ざるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひ澄まし給へる、まこと聖の掟になむ見え給ふ」ときこゆ。いまだ形はかへ給はずや。俗聖とかこの若き人々のつけたなる。哀なる事なり」など宣はす。



## 八宮の態度

源氏の君は一生を榮華に終り給ふに反して、異母弟の八の宮の道心堅固がいかに異母兄の生涯に相反してゐるかを味ふべきではないか。尙ほ八の宮の態度の神々しさを、同じ巻に薫の君が訪ふ條に於て

思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心法文など、わざと賢しげにはあらで、いとよく宣ひ知らず。聖だつ人、才ある法師などは世に多かれど、餘りこはくしう、氣遠げなる宿徳シヨクの僧都、僧正のきは、世に暇なく生直キスグにて物の心を問ひ顯さむも、事々しくおぼえ給ふ。又その程ならぬ佛の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊きはあれど、けはひ卑しく言葉だみて骨コチなげに物馴れたる、いと物しくて、晝はおほやけ事に暇なくなどしつづ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに、召し入れ語らひ給ふにも、いと流石に物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しき様して、宣ひいづる言の葉も、おなじ佛の御教をも、耳近きたとひに引き寄せ、いとこよなく深き御悟にはあらねど、よき人は物の心得給ふ方の、いと殊に物し給ひければ、やうく見馴れ奉り給ふたびごとに、常に見奉らまほしうて、暇なくなどして程ふる時は、戀しうおぼえ給ふ

と見えたる外に尙ほ心にくくなつかしい敘述も多くあるが、さのみはと思つて姑く割愛する。

## 浮舟落飾

薫の君が八の宮に逢つた感想に、當時の聖法師が多くてもえらくも親しみ難い者、又學徳を積んだ僧正や僧都などいふ類は、非常に忙はしく、又持律持戒の僧は尊くはあるが、下品で訛言が多く同情に乏しく無骨で好ましくないのに、此の八の宮は誠に高尚で狎れ近づくも憚る程であると感心したと云ふのは、畢竟當時の佛教者の通弊を擧げたものと見られる。

又浮舟の君が横川の僧都に乞うて尼となり行ひますことを「手習」の巻に

姫宮一宮女おこたり果てさせ給ひて、僧都ものぼりぬ。彼處○小野の尼に寄り給へればいみ

じく恥ぢて「なか／＼かゝる御有様○浮舟出家の姿にて、罪も得ぬべきことを宣ひも合せずなりにけることなむいと怪しきなど宣へどかひなし。

今はたゞ御行をし給へ。老いたる若き定めなき世なり。はかなきものに思しとりたるもことわりなる御身をや」と宣ふにも、いと恥かしく○浮舟なむ覺えける。御法服新しくし給へとて、綾羅衣アヤスモノなどいふ物奉りおき給ふ。某都○僧が侍らむ限りは仕らまつりなむ。何か思ひ煩ふべき。常なき世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるゝ限りなむ、所せく捨てがたく、我も人も思すべかめることなめる。かゝる林の中に、行ひ勤め給はむ身は、何事をかは怨めしくも恥かしくも思すべき。このあらむ命は葉の薄きがごとしといひ知らせ



## 悟道の眞諦

せて「松門に曉いたりて月徘徊す」と法師なれど、いとよし／＼しう、恥かしげなるさまにて宜ふことどもを、思ふやうにも云ひ聞かせ給ふかなと聞きわたまへり。

作者が僧都の言葉に托して諄々と浮舟の君に悟道の眞諦を説く一節は、或は「白氏文集」の句を按排して巧に論し聞かせる終には

思ふやうにも言ひきかせ給ふかなと聞きわたまへり

といつて、浮舟の君が理想通りに教訓して下さる事よと感激して聞いてゐた」と結んだのはやがて此の物語の大團圓に「夢の浮橋」の巻を以て最終とする道程を示すものであらう。

「源氏物語」の大團圓たる「夢の浮橋」の巻は、文中に夢と云ふ語が五ヶ所見えてゐる。その第一は薫の君が、浮舟の君の蘇生してあつたのを僧都から聞かれて

夢の心地してあさましければ、つゝみもあへず涙ぐまれたまひぬるを云々

其の第二は、薫の君が僧都に浮舟の出家してゐる所に同行を促す條に

夢のやうなることどもを、今だにかたりあはせむとなむおもひ給ふる

と見え、第三は浮舟の君が、弟の小君を見て

母のいとかなしくて、宇治にも時々ゐておはせしかば、すこしおよすけしまゝに、かた

夢の浮橋の  
因縁

みに思へりし童心を思ひ出づるにも夢のやうなり

と見えてゐる。其の第四は、薫の君が浮舟の君に送つた消息の詞に

いまはいかであさましかりし世の夢語りをだにと、いそがるゝ心の我ながらもどかしきになむまして人めいかにと、かきもやりたまはず

法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

と見えてゐる。此の歌に據りて此の巻の一名を「法の師」とも云ふ。其の第五は、浮舟が薫への返書に困却した條に

今きこえむ、昔の事思ひ出づれど、更におぼゆることなく、怪しういかなりける夢にかとのみ心も得ずなむ

と見えて都合五ヶ所に及んでゐる。而も其の夢と感じたのは、浮舟の君と薫の君との間に於ける今昔の境遇の驚くばかりの變遷についてである。然しながら苟くも天地間に生を享けたるものゝ物發したる愛情の相觸るゝ所に起つた事柄を更に冷靜なる境地に立つて考へれば、夢と思ふより外に形容すべき言葉もない。因つて作者は此の愛情の寸時も止まないのが人類の自然と觀じた名言を此の巻に僧都の口を假りて何と云つたであらう。僧都が薫への返辭に



かたちをかへ、世を背きにきと覺えたれど、髮髯をそりたる法師だに、あやしき心はうせぬもあなり。まして女の御身といふものは、いかゞあらむ。いとほしう罪うべきわざにもあるべきかなと、あぢきなく心みだれぬ。

と見えてゐる。是は薫が浮舟出家の後でも逢ひ見て夢のやうな今昔の物語を試みたいと僧都に請うた時の返辭としてある。夢を以て大團圓とした事について佛經を引く人もあるが、只夢でよいのである。例へば前編源氏の君の生涯を結ぶに「雲隱」を以てしたごとく、浮舟對薫との心境を夢と観じて諦められぬ諦めを想ひやらせたものと見るが至當であらう。學者往、莊子を引き、將又古詩を引いて敷衍するもあり、又

情操物語の本旨

世の中は夢のわたりの浮橋かうちわたしつゝものをこそおもへ

と云ふ古歌に據り、又金剛經の「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」などを引くのは「夢の浮橋」の卷の因據とならうが、「情操物語」の本旨ではないと信ずる。

## 第十二章 歴史物語

六國史—榮華物語—大鏡の出現—大鏡の紀傳體—史論の祖大鏡—榮華物語の挿繪

六國史

我が邦の歴史は「日本書紀」を始めとして、「三代實錄」迄、皆勅撰の正史で正格な漢文を以て記された編年體のものである。其の數凡べて六種あるが爲めに、世に「六國史」と云ふ。其の年代は、神代は姑く措いて、神武天皇から光孝天皇に至る一千五百五十七年の事實を記してあるが、悉く表面に表はれたことを敘述してあつて、其の裏面にあつた詳細なことは記してない。殊に是の「六國史」の後は朝廷に於て修史の舉が絶えた。宇多天皇以後修史の事のないのは別に説があるが此には略する。

榮華物語

然るに鳥羽天皇の頃に至つて、假字を用ひて當時の口語文の口調のまゝに上流社會の詳細なる真相を描寫した「榮華物語」が出来た。これが我が邦で國文を以て書いた歴史物語の始である。

歴史物語

抑、從來「源氏物語」のごとき「情操物語」は行はれてゐたが、未だある時代の事實をそ



のまゝに記したものは、物語の例として世に表はすものがなかつた。然るに、國文が隆盛に趣くに連れて其の時代の人々が日記と云つて、日々に起る出來事を記し留めることが多くなり、又宮中の女房達などが見聞のまゝを書き留めたものも漸次に多くなつたものを珍重する傾向も生じて來た。此のごとく一般の風潮が古代のものを悦ばず現代のものを現代に讀む趣好が擡頭して來た所に、早くも着眼した學匠が、此等の日記や女房の手記の類に據り又は口碑に語り傳へたものをも集めて一篇の物語に作つた。蓋し時代の趣勢に従つて變遷する文學の生命を敏速に把握したもので、全く舊套を蟬脱して更に獨創の天地を開いたものである。今此の作者の意中を察するに、平安朝に國文が自由自在に其の思ふ所を敘述する唯一の機關となつてから、各其の心に思ふことを物語に作ることが流行する時に當つて、當時の人々が讀みと讀む物語は、たとひ現代の驚異的事實でも、之を現代の事として書くことを避けたことは『源氏物語』にも見えてゐる通りである。然るに、やゝ降つて平安朝の末期に近づけば社會の風潮は既にかゝる迂遠なる讀物に満足せずして、當時の事實をありのまゝに記して讀み味ふと云ふ風習に變つて來た。此に於て先づ『榮華物語』の作者は、平安朝の初期から漸次に勢力を扶植し來つた藤原氏が御堂關白道長に至つて其の頂點に達したことを看破して、

## 大鏡の出現

## 大鏡の紀傳

此に道長の榮華を中心とした此の物語を作つて當時の讀者に満足を與へた。其の識見と其の手腕とは實に刮目して見るべきものである。たとひ『源氏物語』に活躍する人物の個性趣好等があり／＼と分明する書き方になつてゐても、現に當時にあつて一般に其の風手に接し、習性を目撃したものの、印象の深さに及ぶべきものではない。かくして『榮華物語』は大部のものが出來たとは云へ、未だ作者が其の識見を以て事實を判斷して評論するまでには到達しなかつた。自己の識見を以て史實を論ずるは最も史學の緊要とする所であり、又大に讀者を啓發する威力あるものである。此に於てか更に『大鏡』の出現を見るに至つた。是亦國文學の進歩發達の證憑と謂ふべきものである。

『榮華物語』が、只ある一部を中心として、其の周圍の生活狀態の詳細を描寫したのに對して、同じ道長を中心とするものながら、更に新らしく其の間に表はるゝ人物の言動を詳細に敘述して人毎に其の傳を立て、又其の時代相に就いても、又或は人物に就いても、作者が意見のある所は、直截に詳論を加へて史論を雜へ、又若しくは、ある事物の起原由來等を考覈したものは、即ち『大鏡』八卷である。

『大鏡』は舊來の編年體記述の例を破つて新に紀傳體假字歴史の一體を創めた。『大鏡』の



史論の祖大鏡

名は猶ほ歴史と云ふに同じく、古今の事蹟を明かに鑑みると云ふ意味であるが、藤原氏二十代間の事跡を巨細となく一目に見るを得ることは、實に其の名に背かぬものがある。さて此の書も亦道長中心で書いたことは、作者の公言してゐる所ではあるが、此の書は到る所に於て作者が自己の意見を、記事中の人物の言に托して、忌憚なく論じてゐる所は、全く史論と謂ふべきものである。我が邦で、史論の元祖としては「大鏡」を推すべきものかと思ふ。而も所々に國體の尊嚴を説き、勤王の大義を論ずる條は、最も注目すべきものであるが、先賢は未だ一言だに論及せられないのは不審に堪へぬ所である。

榮華物語の挿繪

「榮華物語」に於て繪を加へて本文と對照しつゝ、讀み味ふやうに作つたのは、未だ從來の物語の範圍を脱しないものであるが、「大鏡」には繪を雜へない。此の相異なる點で、最も其の性質の相同じからざる所を覺らなくてはならぬ。惟ふに、「榮華物語」を絢爛たる錦の小裂を巧に縫ひ合はせたる衣とすれば、「大鏡」は、精巧に織り成したる綴錦とも譬へようか。

### 第一節 榮華物語

榮華物語—又名世繼—四十一卷—(一)書名の由來—(二)上下篇の區別—  
上篇目次—下篇目次—(三)作者—(四)著作年代—(五)文體と特色

「榮華物語」

「榮華物語」四十一卷、又「世繼」と云ふ。一卷は目錄系圖で、本文四十卷。宇多天皇寛平年中から筆を起して、堀河天皇寛治六年まで、約百五十年程の事を記してあるが、其の主とする所は、御堂關白道長の榮華の古今に冠絶せることを敍するにある。

### 第一 書名の由來

書名の由來

「榮華物語」と名づけたことは、作者が自から記したごとく道長の榮華を中心として記したことに由るもので、其の因據と見るべきは、左の例に就いて知ることが出来るであらう。

第十一卷「荅花」の卷に

春宮<sup>○後一條</sup>の生れたまへりしを、殿の御前<sup>○道長</sup>の御初らまごにて、榮華<sup>○</sup>の初花<sup>○</sup>と聞えたるに、この御事<sup>○皇女</sup>をば、荅花とぞきこえさすべかめると見え、又同卷に

この土御門<sup>○道長</sup>に、いくそたび行幸ありて、數多のきささいでいらせ給ひぬらむと、世のあえものに、きこえつべき殿なり。これを勝地といふなりけり。これを榮華とはいふにこそあめれと、あやしきものどもの、下をかぎれるしなども、よろこびなみさかえたり



とも見え、又第十五段「疑ひ」の巻に

たゞ此の殿長の御前の榮華のみこそ、ひらけはじめにしより後、千年の春の霞、秋の霧にもたちかくされず、風もうごきなくして、枝を鳴らさねば、かをりまさり、世にありがたくめでたきこと、優曇華のごとく、水におひたる花の青き蓮の、世にすぐれてにほひならびなきがごとし。

とも見えてゐるので明瞭である。

上下篇の區別

第二 上下篇の區別

第一段「月宴」の巻から、第三十段「鶴の林」の巻までを上編となし、第三十一段「殿上の花見」の巻から、四十段「紫野」の巻迄を下篇とすることは契沖の創見である。蓋し「源氏物語」の編次に倣うたものであらう。上篇には、發端を措いて村上天皇の御世から「鶴の林」まで三十帖には、後一條天皇の萬壽五年二月に至る八十餘年間の事跡を記し、下篇は「殿上の花見」から最終の「紫野」まで十帖、上篇道長薨去の後を承けて、後一條天皇の長元三年十一月以後堀河天皇寛治六年二月に至る六十二年間の事を記してある。其の中心とする人物

は道長の子頼通である。此の父子二代の事歴を上下二篇に書いたのも源氏の君を四十四帖、其の子薫の君を宇治十帖に書いたと一致してゐる。此の上下二篇の間に二年餘又下篇にも後冷泉天皇の末頃から後三條天皇の初まで三年程の記事が缺けてゐる。而して每篇皆其の内容の文に由つて風雅な名がついてゐる。其の篇目は次のごとくである。

上篇目次

上篇 目次

- 第一 月 宴 (宇多、醍醐、村上、圓融)
- 第二 花 山 (圓融—花山)
- 第三 さまぐりのよろこび (一條)
- 第四 見はてぬ夢 (一條)
- 第五 浦々のわかれ (一條)
- 第六 耀く藤壺 (一條)
- 第七 鳥部野 (一條)
- 第八 初花 (一條)
- 第九 石蔭 (一條)



✓

第十	日蔭のかづら (三條)
第十一	つぼみ花 (三條)
第十二	玉のむら菊 (三條、後一條)
第十三	木綿 <small>フシ</small> 四手 <small>テ</small> (後一條)
第十四	あさみどり (後一條)
第十五	疑 <small>ヒ</small> (後一條)
第十六	もとの雫 (後一條)
第十七	音 <small>ネ</small> 樂 (後一條)
第十八	玉のうてな (後一條)
第十九	御 <small>ミ</small> 裳 <small>モ</small> 着 <small>キ</small> (後一條)
第二十	御 <small>ミ</small> 賀 <small>カ</small> (後一條)
第二十一	後 <small>ノチ</small> 悔 <small>クムル</small> 大 <small>ダイ</small> 將 <small>シヤウ</small> (後一條)
第二十二	鳥 <small>トリ</small> の <small>ノ</small> 舞 <small>マユ</small> (後一條)
第二十三	駒 <small>ウマ</small> くらべの行幸 (後一條)

第廿四	若 <small>ニギハヤヒ</small> ばえ (後一條)
第廿五	望 <small>ノゾミ</small> 月 (後一條)
第廿六	楚王の夢 (後一條)
第廿七	衣 <small>イ</small> の <small>ノ</small> 玉 <small>タマ</small> (後一條)
第廿八	若 <small>ニギハヤヒ</small> 水 <small>ミヅ</small> (後一條)
第廿九	玉 <small>タマ</small> のかざり (後一條)
第三十	鶴 <small>ツル</small> の <small>ノ</small> 林 <small>ハヤシ</small> (後一條)
下篇 目次	
第卅一	殿上の花見 (後一條)
第卅二	歌 <small>ウタ</small> 合 <small>アヒ</small> (後一條)
第卅三	きるはわびしと歎く女房 (後一條、後朱雀)
第卅五	くものふるまひ
第卅六	根 <small>ネ</small> 合 <small>アヒ</small> (後朱雀)
第卅七	烟 <small>ケリ</small> の <small>ノ</small> 後 <small>ノチ</small> (後冷泉)

第十二章 歴史物語



第卅八 松のしづえ

第卅九 布引の瀧 (後白河)

第四十 紫 野 (後白河、堀河)

### 第三作 者

作者は或は赤染衛門と云ひ、或は藤原爲業とも云ひて未だ定説がない。近頃、上篇は赤染衛門の作、下篇は出羽の辨の作と主張する説もあるが、安藤年山の考證には

赤染衛門が家集を考ふるに、夫匡衡におくれて尼になりたるに、その子ウチノコ舉周にむまごのいできたる比は長久二年也。其後衛門はいつのほどまで存生せられたるとは知らねど、榮華物語は寛治六年までの事を記せれば、くはしく年數を考ふるに、衛門百二三十歳まで生存ならねば年紀符合せず

と云ふ意見を述べてゐる。又出羽の辨と云ふ説は、其の因據は明かでない。今按ずるに、上篇と下篇とは、其筆致大に異なるものがあり、又上篇には和漢の典故よりも佛典を引くことが頗る多い。是の點から察すれば、學殖の極めて深いものゝ手に成つたものゝやうである。「書籍

目錄」に藤原爲業と見え、又尊卑分脈に、閑院左大臣冬嗣系に「爲業、伊豆伊賀等ノ守、皇太后宮大進、從五位下出家、法名寂然、世繼作者」と見えてゐて崇徳天皇の頃盛であつた人と云ふ。「榮華物語」を一名「世繼」と稱した事は、諸書にあつて「大鏡」と混ざる恐もあるが、「日本書籍目錄」假名の部に「世繼、四十卷、白宇多天皇御宇至堀川院御宇載君臣事」と見えて、次に「大鏡六卷」とあるのを考ふれば、正しく「世繼」は此の「榮華物語」を指したものである。されば、此等の旁證に據つて上下共に藤原爲業の作と見るが妥當かと信ずる。而して、上篇には主として宮中の官故に練達した女房の日記類を綜合して敘述し、下篇は其の後に出來た日記類を本として敘述したものであらう。故に其の筆致が同一でない。畢竟資料としたものゝ巧拙に由るもので作者が殊更に文體を變へたのではない。又上下篇の作者が二人あると見るのも從ひ難い説と思ふ。伴信友の考證に

そもく此物語の書ざまよ。もとより宮仕せる女房の書たるさまに物して、宮中の御みそか事、内々のいさしげごと、女房のこととひさま、きぬの衣目など、萬いとこまやかに書續けたる趣、いかにも御前近く仕奉れる女房ならではの絶えて知るまじき事ともなるがうへに、人々の心の中を思ひやりて云へる心ばへのたをやぎてあはれ深げなる文詞のくだしき



など、すべていとめしきを思ふにも、きはめて男子の新たに撰びて書調へたる物にはあらで、かはら其御世々々の御前近く侍へる女房の書記せる日記、又これかれが見聞せる事どもを、おのがし々に私に書記せる日記の類の多かりけるを、取集めて書きつゞれるものなるべし。初花の巻の文は大かた紫式部日記をもつて記せりと見えたり、此外にもなほありぬべしと見えたる説は大體動かぬ所であらう。

#### 第四 著作年代

此の物語の作者年代に就いては、先賢諸氏の考證種々あるが、いづれを正確と定め難いのである。只我が師黒川眞頼翁は、其の文體に據つて鳥羽天皇頃であると云はれた。其の所以は文體の條に譲つて此には余が考へ得た所を擧ぐれば、下篇の最終紫野の卷は、白河天皇應徳元年九月から、堀河天皇寛治六年二月までの記であるが、十六年を経た鳥羽天皇の嘉承二年十二月鳥羽天皇御即位の事を記した「讃岐典侍日記」に、此の物語の「着るはわびしと歎く女房」の條の記を引いてゐる所がある。此に據つて考へれば、作者爲業は崇徳天皇の頃に盛であつた人なる所から推して、鳥羽天皇の頃に成つたものであると云はれた師説も其の所

以あることと思はれる。其の「讃岐典侍日記」の文は

われは何事にも目もたゞずのみおぼえて、南の方を見れば、れいの八咫鳥、見も知らぬ物ども、大かしらなどたてわたしたる、見るも夢のこ、ちぞする。かやうの事は世繼など見るにも、その事かゝれたるところは、いかにぞやおぼえて、ひきこそかへされしか

と見えてゐる。此の「世繼」は大鏡の一名なる世繼ではなく、此の物語を指したものであつて、而も下篇「著るはわびしと歎く女房」の中に見えたる御禊大嘗會の條に

大かしらなどいひて、れいのおそろしげにすぢふときかみよりかけて、さすがにうるはしくてわたる。馬に乗りてもたれば、心々にて、やゝいふほどをかし。内の女房十人、馬にてつかうまつるこそ、いかにけせうに、わりなからむと、いとほしけれ

と見えてゐる。是は大嘗會の時のことであつて、日記は御即位の時の條に出てゐる。其の時が同じでないが、大かしら云々の記事を思ひ出して引いたのであらうから、年代の考證には旁證とするに足ると思ふ。

#### 第五 文體と特色



『榮華物語』は其の文章を一句一句切らずしてつゞける書き方であるが、これを文章をすべらすと云ふ。當時此のごとき文章を興味ありとして人々賞玩した。第一段「月ノ宴」の始に世はじまりて後、この國のみかど、六十餘代にならせたまひにけれど、この次第書きつくすべきにあらず。こちよりのことをぞしるすべき。世の中に宇多のみかどと申すみかどおはしましけり。そのみかどのみこたちあまたおはしましける中に、一のみこ敦仁の親王と申しけるぞ位につかされたまひけるこそは醍醐の聖帝と申して、世の中に、天の下めでたきためしにひき奉るなれ

と見えてゐる。右の末段のつゞけ方を見て其の文體の異なることが知れるであらう。

又當時殿中しつらひの調度を始め、女房の装束等の有様を仔細に書きつゞけた。是は當時の風習であるから、此の仔細を一目瞭然たらしむる爲めに精巧なる彩色繪を處々に加へてある。是の風は既往の「源氏物語」と異なる所がない。此の物語は其の實歴史物語であるが猶ほ彩色繪を加へる。是が上代の物語の本色で、繪のないのは之を略したものであると知らなくてはならぬ。此の物語には公私の儀式、絲竹管絃の興、祈禱法會の莊嚴を始め、宮殿調度装束男女の容貌等の有様を仔細に書いた所は多いが、今は「耀く藤壺」の卷なる藤原彰子が

特色

女御となりて入内の條を示す。

姫君の御有様、更なることなれど、御髪<sup>ケ</sup>だけに五六寸ばかり餘らせ給へり。御かたちこそえさせむ方なく、をかしげにおはします。まだいとをさなかるべき程に、聊かいわけたる所なく、いへばおろかにめでたくおはします。見奉り仕らまつる人々も、あまりわかとおはしますを、いかに物のはえなくやなど、思ひ聞えさせしかど、あさましきまでおとナビさせ給へり。萬めづらかなるまでにて參らせ給ふ。昔の人のありさまを今き、あはするには、いとぞ物ぐるほしう、その折の人の、きぬすくなに綿薄くて、めでたきをりふしにもいでまじらひ、内々にも、いかであり經たらむとおぼえたり。この頃の人は、うたてなさせなきまで着重ねても、なほこそは風などもおこるめれ。されば、いにしへの人の、女御後の御方々など思ふやうに、かたはしにあらざと見えたり。<sup>○中略</sup>

この御方子<sup>○彰</sup>藤壺におはしますに、御しつらひも、玉も少しみがきたるは、光のどかなるやうにもあり、これは照り輝きて、女房も、せうくの人<sup>○</sup>は、御前の方にまゐり仕らまつるべきやうにも見えず。いとみじうあさましう、様ことなるまでしつらはせ給へり。御几帳御屏風<sup>○</sup>のよそひまで、皆蒔繪螺鈿をせさせ給へり。女房は、同じき大海の摺裳、織



物の唐衣など、昔より今におなじやうなれど、これはいかにしたるとまでぞ見えたる。女御のはかなう奉りたる御ぞの色かをりなどぞ、世にめでたき例にしべき。御とのゐしきりなり。

斯のごとく當時の女子が容色の美の特長とする髪の長いこと、女が數多衣服を重ね着ることを始め、藤壺の御殿の裝飾の美、御几帳御屏風に蒔繪や螺鈿を施したのも格別豪華なものであるが、尙ほ又女房の禮装たる裳唐衣の形式は古代から變らないが、善美を盡したものであると云つてある。之を挿畫と對照して見たる時の心地は目もくらむばかりであつたらう。此の他是に類する記事は甚だ多くあるが、今は省略する。要するに「源氏物語」のごとく、一人にして多種多様品性も趣味も相異なるものを秩序的に描寫したるものも、固より歴史研究の資料として貴重であるが、此の物語は實際に活動する人物を基礎として、其の間に起つた事實を詳細に描寫したものであるから、其の文章も史實と相待つて我が邦文化の研究資料として亦誠に貴重なものである。殊に上篇には、國書は固より博く漢書を典據とし、又更に佛書を引用したことは却つて多きに居ることは、著者の該博なる學殖の程度を想見すべきである。

## 第二節 大鏡

大鏡—一名世繼物語—第一編述の主眼—第二帝記敘述の理由—第三國體闡明—第四大和魂—第五佛敎本位—第六「史記」中の「書」に倣ふ

大鏡

「大鏡」八卷、一名「世繼物語」紀傳體の假字歴史で、帝王の本紀と臣下の列傳とに分け記してあるのは、我が邦に於て最も獨創的著作と稱すべきものである。而も此の書の組織を作者自身が得意に筆を執るとはせずして「大宅世繼」と云ふ老人が、其の竹馬の友、「夏山繁樹」と云ふ老人に、雲林院の菩提講の席上で物語るのを、傍の若侍が熱心に聽いて書いたと云ふ趣向に構へて記したのである。此の意匠は亦從來の物語の例に見ない所である。「源氏物語」も昔から語り傳へた物語を書き留めると云ふ形式を用ゐ、而も雨夜の品定に、源氏の君と頭中將との談話を發端として、更に左馬頭や式部丞など云ふ人を假り來つて遂に全篇に亘る骨子を述べてあるから、對話形式に託することは必ずしも「大鏡」に始まるとは云ひ難からうが、雲林院の菩提講を背景として百有餘歳の老人同士が親しく見聞した自己の經驗談について隔意なく物語る形式を取つた爲めに、處々に其の事件によつて評論を下してある所は全く



堂堂たる史論と稱すべきものである。殊に到る處に於て、我が國體の尊嚴を説き、大義名分を明かして、不知不識の裡に國民精神の活動を説く事は、從來の學者が未だ嘗て言及せられぬ所であるが、作者は大に此の點に力を用ゐたものである。尙ほ作者が本書を著す抱負は次のごとく述べてゐる。

世繼、よしなしごとよりは、まめやかなることを申しいでむ。よく／＼誰も／＼聞し召せ。今日の講師の説法は菩提の爲めとおぼし、又翁らが説く事は日本紀をきくとおぼすばかりぞかしといへば、僧俗げに説經説法多く承はれど、かく珍らしき事宜ふ人は更におはせぬなりとて、年老いたる尼法師ども額に手をあて、信をなしつゝ聞き居たり

とある。「日本紀」とは「日本書紀」であるが、當時況く我が邦の歴史と云ふほどの意に應用してあつた。又「大鏡」と名づけた理由は、發端の一節に

大犬丸をとこ、いでき、給へや、歌ひとつ作りて侍り。といふめれば、世繼、いと興あることなりとて、うけたまはらむといふ。繁樹いとやさしげにいひいづ

あきらけき鏡にあへばすぎにしも

いまゆくすゑのこともみえけり

といふめれば、世繼いたく感じて、あまたたび誦じて、うめきて返し

すべらきのあともつぎ／＼かくれなく

あらたにみゆるふるかがみかも

今やうの葵八つ花形の鏡、蒔繪螺鈿のはこにいれたるにむかひたる心ちし給ふや、いでやそれはさきらめけど、くもりやすくぞあるや。いかに古の古代の鏡は、かねしろくて、人手ふれねど、かくぞあかさなど、したり顔に笑ふ顔つき繪にかゝまほしく見ゆ。あやしなから、さすがなるけつきて、をかしく、まことにめづらかになむと見えてゐる「大鏡」とはなくとも「あきらけき鏡」とあるを思ひ合せて見よ。

## 第一 編述の主眼

作者が「大鏡」編述の本旨は、藤原道長の豪華を記するにある。發端の一節に

まめやかに世繼が申さむと思ふことは、異事かは。只今の入道テング殿下〇道の御有様の、世に勝れておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたのみかど后、又大臣公卿の御上をつゞべきなり。その中にさいはひ人におはします



この御有様を申さむと思ふ程に、世の中のことのかくれなくあらはるべきなり。つてに承はれば、法華經一部を説き奉らむとてこそ、まづ餘經をば説き給ひけれ。それを名づけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかのごとくに、入道殿の御さかえを申さむと思ふほどに、餘經の説かるゝといひつべしなどいふも、わざ／＼しく、こと／＼しくきこゆれど、いでや、さりとて、何ばかりのことをかと思ふに、いみじうこそ言ひつゞけ侍りしか。是が作者の自序と見るべき發端の一節に告白した所である。

### 第一 帝紀敘述の理由

帝紀敘述の理由

道長を中心として書くに先だち、帝紀を述ぶる理由は、次の文に據つて明白である。卷一後一條天皇の條に

帝王の御次第は、申さずともありぬべけれど、入道殿下の御榮華も、何によつてひらけ給ふぞと思へば、まづ帝后の御有様を申すなり。植木は、根をおほしてつくりひたてつればこそ、枝も繁りて、このみも結べや。しかあれば、まづ帝王の御つゞきをおぼえて、次に大臣の御つゞきはあかさむとなり、と云へば、大夫丸をとこ○繁いで／＼いといみじう

めでたしや。こゝらのすべらぎの御有様をだに、鏡をかけ給へるに、まして大臣などの御ことは年頃やみにむかひたるに、朝日のうらかかにかさしいでたるにあへらむ心地もするかな。また翁らが家の女どもものもとなるくしげの鏡のかげ見えがたく磨くわざも知らず、うちはさめておきたるにならひて、あかくみがける鏡にむかひて、わが身のかたちを見るにかつはかげはづかしく、又いとめづらしきにも似たまへりや。あな興ありのわざや。更に翁今十廿年の命は、今日延びぬる心地し侍り、といたくゆけするを、見きく人々、をこがましうをかしけれども、いひつゞくることどもはあろかならず、おそろしければ、物もいはで皆聞きあたり。と見えてゐるので明白であらう。

### 第二 國體闡明

國體闡明

『大鏡』は從來の學者の説に只藤原氏の擅政を書いたもので皇道研究に裨益がないと云はれてゐる。是蓋し精讀せざるの粗忽であらう。今本文に就いて其の最も顯著な例を擧ぐれば、次の通りである。光孝天皇御即位に當つて源融が一旦臣籍に下りながら嵯峨天皇第十二皇子



を名として、陽成天皇の御後を嗣がうと主張せられた時、藤原基經が「皇胤なれど姓を賜はりて只人にて仕へて位につき給ふためしやある」と一言の下に名分論を振翳したので、光孝天皇が、仁明天皇第三皇子を以て五十五の御齡で御即位に相成つた。其の文は列傳第一基經傳に

小松の御門○光孝の御母、この殿○藤原基經の御母のはらからにはしませす。さてちごより小松の御門をば親しく見奉らせ給ひて、事にふれて警策キヤウサクにはしませすを、あはれ君かなと、見奉らせ給ひけるが、良房の大臣の大饗にや、昔は親王達、かならず大饗につかせ給ふことにて渡らせ給へるに、雉キキスの足は、必ず盛るものにて侍りけるを、いかゞしけむ、尊者の御前に取落してけり。陪膳する人、親王の御前のを取りて、まどひて尊者の御前に据うるを、いかゞ思召しけむ、御前にもしたる大殿油を、やをらかいけたせ給ひける。この大臣○基經は、その折は下薦にて、座の末にて見奉らせ給ふに、いみじくもせさせ給ふものかなと、いよ／＼見めて奉らせ給ひて、陽成院ありさせ給ふべき陣の定めにはさぶらはせ給ふ。融の大臣、やむごとなくて、位につかせ給はむ御心深くて「いかゞは近き皇胤を尋ねば融らも侍るは」といひ出で給へるを、この大臣こそ「皇胤なれど姓を賜はりて只人にて

仕へて、位に即きたるためしやある」と、申し出で給へれば、さるあることなれば、この大臣の定めによりて、小松の御門は位に即かせ給へるなり。

と見えてゐる。此の事を「古事談」にも昭宣公○基經云雖爲皇胤、給姓只人ニテ被仕タル人、即位之例如何云々、融卷舌止云云とあるのを併せて見て、皇位御繼承の嚴乎たるに、融も屈伏した有様を知ることが出来る。

又藤原公季は、其の姉安子が、圓融天皇の御母である爲に、幼少の時天皇と同じやうに宮中で養育せられて君臣の別もない程であつたが、只供御の臺だけは、公季よりは一寸高くしてあつたことは流石に名分を正したのである。然しながら、世人が公達が宮中に養育せらるることは古來ないことであると非難したと云ふこと、天皇も亦君臣の別はありたいものであると御歎息があつたと云ふことを、卷三公季列傳に

この生みおき奉らせ給へりし太政大臣殿○公季をば、御姉の中宮○安子村上天皇の中宮さらなり。世の常ならぬ御族思ひにはしませば、やがて養ひ奉らせ給ふ。内にのみおはしまして、御門○村上も、いみじうらうたきものにせさせ給へば、常には御前に侍はせ給ひて、何事も宮達の御同じやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御もの召す御臺のたけばかりをぞ、一



寸おとさせ給ひけるをけぢめに、しるき事にはせさせ給ひける。昔はみこだちだに、幼くおはしますほどは、内ずみせさせ給ふ事なかりけるに、このわか君○公のかくて侍はせ給へば、あるまじきこと、そしり申せど、かくて生ひたせ給へれば、なべての殿上人などになずらはせ給ふべきならねど、若うおはしませば、おのづから御戯れなどのほどにも、なみなみにふるまはせ給ひしをりは、圓融院の御門「おなじ程のおとゝどもと思ふにや、かゝらであらばや」などぞうめかせ給ひける。

と見えてゐる。何と畏いことではないか。天皇は公季よりも二歳の御年下におはしましたのである。

#### 第四 大和魂

大和魂

藤原基経は、光孝天皇を諸皇子中から選擇して皇位に即かせ奉つた功臣である。其の太郎時平は左大臣となり、右大臣菅原道真と相並んで大政を輔翼した。然るに、一朝謀叛の企ありとして、道真を陥れた結果、其の子孫が皆夭折したと世人が言ひ傳へたことを、卷二に記してある條に、時平はかく道真を陥れた人とは云へ、大和魂などはいみじくおはしましたる

ものを」と書き出して社會奢侈の弊風を改めたことが記してある。其の文は

さるは、大和魂などはいみじくおはしましたるものを。延喜の世間の作法、したゝめさせ給ひしかど、過差をばえしづめさせ給はざりしに、この殿○時制を破りたる御装束の、ことの外に、めでたきをして、内に参り給ひて、殿上に候ひ給ふを、御門小菰より御覽じて、御氣色、いとあしくならせ給ひて、職事を召して「世間の過差の制、きびしき所に、左のおとゝの、一の人といひながら、美麗殊の外にて参れる、便なきことなり、すみやかに罷り出づべきよし仰せよ」とおほせられければ、うけたまる職事は、いかなる事にかとおそれ思ひけれど、参りて、わなゝゝゝ、しかゝの事」と申しければ、いみじく驚きかしてまゝ承りて、御隨身の御さき参るも制し給ひて、急ぎまかり出で給へば、御前どもも、あやしと思ひけり。さて本院の御門、一月程さゝせて、御簾の外にも出で給はず、人などの参るにも、勘當の重ければとて、逢はせ給はざりけり。さりしにこそ、世の中の過差はたひらぎたりしか。うちゝに承はりしかば、さてばかりぞ、静まらむとて、御門と御心合はさせ給へりけりとぞ。

と見えてゐる。當時に「大和魂」と云つたのは奉公の精神で、いはゆる學問の智即ち漢才に



對する稱なることは既に上章に述べたごとく「やまとごころ」である。

又同じ條に、道眞が雷となつて清涼殿に落ちかゝつて來た時に、時平が太刀を抜きかけて生きてゐた時に、右大臣であつたものは左大臣には一步譲るべきであると俾倪したので、雷鳴が止んだ。是は時平の權威ある爲ではない。王威の畏きことを示されたものであるといふ事が載せてある。其の文は

北野のかみにならせ給ひて、いと恐ろしく神なりひらめき、清涼殿におちかゝりぬと見えけるに、本院の大臣<sup>○時</sup>太刀をぬきかけて、生きてもわがつぎにこそものし給ひしか。けふ神となり給へりとも、この世には、われに所おき給ふべし、いかでかさらではあるべきと、にらみやりて宣ひけるに、一度はしづまらせ給へりけりとぞ、世の人申し侍りし。されど、それはかの大臣のいみじくおはするにはあらず、王威のかぎりなくおはしますによりて、理非を示させ給へるなり。

と見えてゐる。「理非を示させ<sup>示</sup>へる」とは、王威には絶対服従して逆ふべきものではないと云ふ道理を人臣に示されたのであると云ふ意である。

又更に盛に大和心を振起して刀伊の賊を撃滅した太宰大貳藤原隆家の大功を敍しては道隆

傳に

彼の國におはしまし、ほど、刀夷國のもの、俄にこの國を打取らむとや思ひけむ、越え來たりけるに、筑紫には、かねて用意もなく、大貳殿、弓矢の本末をも知り給はねば、いかゞとおぼしけれど、やま<sup>○</sup>と心<sup>○</sup>かしこ<sup>○</sup>おはする人にて筑後、肥前肥後、九國の人をおこさせ給ふをばさるものにて、府の内に仕うまつる人をさへおしとりて、戦はしめ給ひければ、かやつが方のものども、いと多く死にけるは、さはいへど、家たかくおはします故に、いみじかりし事平らげ給へりし殿ぞかし。<sup>○中</sup>略

### 第五 佛教本位

佛教が當時全盛を極めて何人も阿彌陀三尊の前には頭が上らなかつたと云ふことを道長建立の法成寺金堂供養の文に

かやうの事どもを見給ふるまゝに、いとしもこの世の榮華御さかえのみおぼえて、染着の心、いととますくにおこりつゝ、道心つくべうも侍らぬに、河内、國そこくに住む何がし聖は、庵より出づる事もせられねど、後世のせめを思へばとて、のぼりまゐらせたり

佛教本位



けるに、關白殿〇額の參らせ給ひて、雜人どもを拂ひのゝしるに、これこそは、一の人に  
おはしますめれと見奉るに、入道殿〇道の御前にゐさせ給へば、なほまさせ給ふなりけ  
りと見奉る程に、又行幸なりて、亂聲ランジヤウし待ちうけ奉らせ給ふさま、御輿の入れ給ふ程な  
ど、見奉る殿達の畏まり申させ給へばなほ國王こそ日本第一の事なりけれと思ふに、お  
おはしまして、阿彌陀堂の中尊の前に、ついゐさせ給ひて、拜み申させ給ひしに「なほノ  
佛こそ上なくはおはしましけれと、この會エの庭にはかしよう結縁し申して、道心なむいと  
ど熟し侍りぬるところ申されしか。

と見えてゐる。惟ふに、奈良の朝に聖武天皇が東大寺盧舍那佛に告げ給ふ詔詞に「三寶乃奴止  
仕閉麻都留」と宣うてから、歷代崇佛の風行はれて後、佛教が天下に瀾蔓して、亦神國の尊嚴を等閑  
にする傾向を生じた。今此の記事を讀みて回顧すれば時勢の推移誠に驚くべきものである。

### 第六 「史記」中の「書」に倣ふ

「大鏡」は所謂紀傳體を用ひて書いた假字歴史であることは既に上條に述べた。抑、紀傳體  
は漢の司馬遷の「史記」に始まる。史記は本紀列傳の外「世家」があつて諸侯の沿革を記し

「史記」中の  
「書」に倣ふ

である。又尙ほ「表」及び書の二種がある。即ち「表」は史上の綱要を一目瞭然たらしめた  
ものであり「書」は禮樂刑政天文貨殖に關することを詳述したものである。

今「大鏡」の敘述を見るに、「史記」の本紀と列傳とに準ずべきものは、以上に述べたが、  
此の他、史記に比すべきものを求むれば、第八卷は古く語り傳へた物語約六十條を記してあ  
る。此の中には本紀列傳に語り得なかつた逸話を撫ひ集めてあるから、皆々珍らしい事が多  
い。殊に「賀茂臨時祭の始」「八幡臨時祭の始」「八幡の放生會」「法成寺の五大堂供養」「三  
條天皇の大嘗會」の儀式、又行幸啓の事、和歌の功德、樂譜の改定などの類を詳述してあ  
る。是蓋し「史記」の「書」に擬したるものと看るべきものではあるまいか。世繼の詞に

たゞしさまでのわきまへおはせぬ若き人々は、そら物語する翁かなと思すもあらむ。わ  
が心におぼえて、一言にてもむなしき事加へて侍らば、此の寺の三寶、今日の座の戒和尚  
に請シヤクぜられ給ふ佛菩薩を證とし奉らむ。中にも若うより、十戒の中に、妄語をばたもちて  
侍る身なればこそ、かく命をば保たれ候へ。今日この御寺のむねとそれを授け給ふ講コウの場  
にしも參りて、あやまち申すべきならず。〇中今日この御堂に影ヒツカ向し給ふらむ神明冥道た  
ちも聞し召せとうち言ひて、したり顔に、扇打つかひつゝ見かはしたるけしき、ことわり



に、何事よりも、おぼやけわたくし、うらやましくこそ侍りしか。

と見えてゐる。惟ふに作者は本來漢學の學識深きものながら、漢學の本旨たる修身、齊家、治國、平天下の實廢れて徒に文筆の末に走つて、學者は世に用ゐられず。之に反して苟くも佛徒としいへば世上から無二の尊敬を受けたことに慊焉たらざるものもあつたらう。然しながら時代に反抗することの不利にして、むしろ和光同塵、椽大の筆を揮つて忌憚なく時代相を直寫して之を後に貽し、千載の下に當時を追懷せしむることの洪益あるを信じてかくも長廣舌を振つたのであらう。讀者玩索して得ることがあらば、能く作者の満足を買ふことが出来るであらう。此の影響に依つて「水鏡」「増鏡」「今鏡」も世に出現するに至つた。「大鏡」作者の「日本魂」は知る人ぞ知る。

### 第十三章 日記紀行

日記  
九曆

「日記」は毎日の記録である。故に我が邦では中古以來朝紳には漢文を以て公私の事を毎日に記した記録が多くある。九條右大臣師輔の「九曆」を始め、世に聞えたものが今日に存するだけでも、殆どん三十種以上に及んでゐる。いづれも、當時の實録であるから歴史の研究資料となることが多大なものである。

斯のごとく男子の「日記」は皆漢文で書くことと定まつてゐた所、醍醐天皇の御世に始めて平假名字を用ゐて書いた「古今和歌集」の序が、公然奏覽に入る世の中となつたのは、能書能文の聞え高い紀貫之の努力であつた。貫之はいかにもして國文を以て自由に我が思ふ所を敘述して、實用に供すきべ時機を待つてゐたものであらうか。「古今集」の序を書いてから三十年を経て、國文を用ゐて旅中の日記を書いた。其の「日記」は即ち「土佐日記」である。然れども未だ男子が公然と平假名を以て國文を書くこと云ふ世の中になかつたから、姑く女子

土佐日記



紀行の祖  
土佐日記

が書くこと云ふこととして書いたのには、更に苦心の存する所を知るべきではないか。但し『土佐日記』は「日記」とは云ひながら、其の實は「紀行」であるから純粹の「日記」とは云ひ難い。但し作者自身が「日記」と云つてゐるから「紀行」とは云はない。然れども、我が邦で國文で書いた「日記」と云へば「土佐日記」を以て矯矢と云はなくてはならない。

爾後自己が日常の事實を始め、種々の感想等を記すことが、女子の間に起つた。其の最も古きは紫式部の手に成つた「紫式部日記」である。次いで右大將道綱母の「蜻蛉日記」、辨内侍の「辨内侍日記」、讃岐典侍の「讃岐典侍日記」等が出来て今日に存してゐる。

前述のごとく「土佐日記」は旅の日記で、固より「紀行」に入るべきものであるが、此には其の製作年代の古さと、國文日記の元祖と云ふべき性質上から見て、最初に説くことにする。而して家にあつての日記には繪を挿入し、旅にあつての日記には繪を加へないのが、本來の體裁である。畢竟「紀行」は匆卒の際の執筆である爲めである。

### 第一節 土佐日記

土佐日記

「土佐日記」一卷 紀貫之が土佐守となつて醍醐天皇の延長八年皇紀一五九〇年 西曆九三〇年彼の國に下り、滿四年の任果て、朱雀天皇の承平五年二月歸京するまでの日記である。然れども、貫之自から記せることを、わざと一行中の女が記した日記のごとく言ひなして貫之を「船君」と稱してある。女子の記したやうに言ひなしたことに就いては、昔から種々の説があるが、畢竟當時に於ける男子の日記は悉く漢文であるのに、今は國文で和歌を雜へて記す爲めに、姑らく女子の記すものとしたのに過ぎないとは云へ、其の實は胸臆に秘めて持つ所の一端を、作者特有の筆を揮つて空前の日記を作らうと云ふ意思が物々として抑へ難いものがあつたのであらうと信ずる。

さて作者貫之は承平四年十二月二十一日午後八時に出立して、翌五年二月十六日京に着くまで五十餘日を経過したのである。かく多くの日子を費やしたことは、浦傳ひ島傳ひする航海の困難と、海賊出沒の恐怖とに脅かされたことは、いかばかり作者の苦痛となつたか、殊に約五年にして始めて故郷に歸るに當つて、最愛の幼女が俄に死んだ悲しみは將又何に譬へようか。悲喜交、到る心境の懊惱は、凡人であつたら意氣銷沈、世を恨み人を咀ふに至らうも測られぬものである。然るに文學の三昧に入つた作者は、船中の不如意、航海中の困苦、



とに對して専ら諧謔を以て憂を忘れ、掌中の珠と愛でかしづいた幼女の死と、大自然の風物とに對しては、獨特の和歌を以て真情を吐露した。抑、其の諧謔は何に據つて試みたか、又事物に對して忌憚なき評論は何を根柢として發表したか。惟ふに、諧謔は「古今和歌集」にも別に一部を設けてある「俳諧歌」に基づいた意匠であらう。忌憚なき評論は、蓋し王威の衰へて教化行はれず、上下亦節義の何物たるかを忘れたる時代相に公憤を漏したものと云はねばならぬ。斯のごとく作者が各方面に涉つて觀察し評論し或は悲歎した間に於いて、片時も啓發を怠らなかつたことは、我が固有の言語美術たる和歌の尊重と獎勵とであつた。

### 第一 旅中の諧謔

廿二日、和泉の國までたひらかにと願ひ立つ。藤原言實トキミサ船路なれど、馬のはなむけす。上中下、酔ひすぎていとあやしく、汐海のほとりにて、あざれあへり。

「船路なれど馬のはなむけすは」、諧謔の第一歩である。又、「汐海のほとりにてあざれあへり」は汐海のほとりに對してあざれ即ち魚肉の餒アザレれると云つたのは、前の船路に馬と云つ

たと同じ對語で、自然に反映せしめた着眼頗る輕妙、而も絶えて卑俗に陥らぬ所は、流石に上手のわざである。又

廿四日、講師、馬のはなむけしにいませり。ありとある上下、童まで、酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞあそぶ。

國分寺の講師即ち住持が、巨多の食物を持つて送りに來られたので、船中の人々を始め童までも酔ひ痴れて人事を辨へぬ程になつて戯れた状況を如何に描くかと云へば、講師は他の屬官などと異にて國民の教化を掌る重職であるから人々が尊敬するものである。而も貫之は、自身の女に假りてあることをきかせて、「いませり」と敬語を用ひ、さて講師は文學あるものと云ふ點に思を馳せて、「文字」と云ふ材料を獲來つて、「一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞあそぶ」と書き去つて、其の裏には「文字」は「手」(書)を書くことを知らぬ者と云ふ意を匂はせて、更に「足」と書き出して「手」を察せしめた運用の妙は凡手の能くする所ではない。尙ほ廿二日の條には「上、中、下酔ひすぎて」と云ふに對して、此には「ありとある上、下、童まで酔ひしれて」と同一の窩に陥らない工夫は貫之でなくては、こなすことは出來ぬものであらう。



## 第二 亡女の哀悼

亡女の哀悼

貫之が在國の際、京都から同道した女子が、俄に死亡したことを歎く和歌は尤も同情に堪へぬものである。而して其の女子を亡つたのを歎く文の基礎となる文は次のごとくである。

廿七日、大津より、浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄にうせにしかば、この頃のいでたちいそぎを見れど、何事も云はず。都へ歸に、女子のなきのみぞ悲しみ戀ふる。ある人々もえたへず、此の間にある人のかきて出せる歌

都へとおもふものかなしきは

かへらぬ人のあればなりけり

又ある時には、

あるものと忘れつゝなほなき人を

いづらと問ふぞ悲しかりける

右の文を按ずるに、此の日記中同船してゐる女に假りた女は、貫之の夫人の心になつて書

いたやうに見えるふし〜が多い。上文に「ある人」と云つたのは貫之を、其の夫人から指したものであることは通篇皆同じである。而も尙ほ深く悲しい情を表はさうとして二首の歌を詠んだ。三月九日の條に

かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、皆人子どもなかりき、いたれりし國にてぞ、子らめるものどもありあへる。皆人、船のとまゐる所に、子をいだきつゝおりのぼりす。これを見て、昔の子の母、かなしきにたへずして

なかりしもありつゝかへる人の子を

ありしもなくてくるが悲しさ

と詠んだ後に、歌を詠む趣旨を述べて

かうやうのこと、歌このむとてあるにしもあらざるべし、もろこしもこゝも、思ふことたへぬ時のわざとか

と述べてゐるごとく、今や悲哀の極、普通の散文で言ひ表はすべきでない時に當つたのである。故に前の一首には、

都へ今や歸ると思へば嬉しかるべきに、却つて悲しいのは、女子が死んだ事のあるのみ



でなく、その失せたる地をさへ立離れ行くと思へば悲しいのである  
と云ひ、一層悲哀の極に達すれば

愛兒の有無をさへ忘れて、有るものとして何處にゐるかと思ねるほど、遂には吾を忘れる  
までの思ひであると云ふのである。

尙ほ正月十一日の條に

この羽根と云ふ所問ふ童のついでにぞ、又昔の人を思ひ出でて、つづれの時にか忘る  
る。けふはまして母の悲しむことは、下りし時の人の數足らねば、古き歌に、「かずは  
たらでぞ、かへるべらなる」といふことを思ひ出でて、人のよめる

よの中に思ひあれども子をこふる

思ひにまさる思ひなきかな

といひつゝなむ

本文に、「けふはまして母の悲しがるゝことは」は、此の十一日は、まして女子の命日であ  
るから殊に悲しむと云ふ意。さて其の悲しがるゝと云ふ文脈は、末の「いひつゝなむ」に  
呼應する文である。「下りし時云々から思ひなきかな」までは貫之の詞である。而して末

のいひつゝなむ」とは貫之が詠んだこの歌を、夫人が誦しつゝ悲しむと云ふ意である。「思  
ひ」と云ふ語を一首の中に三つ重ねて思ふ情の切なるを表はした敘述は人の肺腑を衝くも  
のではないか。

### 第三 航海中の困難

土佐から京都まで、五十餘日に亘る般海中最も警戒したのは風波の恐怖、降雨の陰鬱、げ  
にさもあるべきことながら、正月十二日から、廿一日まで十日間、同じ所に泊つたことは如  
何ばかり困難であつたらう。

十二日 雨降らず。

十三日 曉にいさゝか雨降る。しばしありてやみぬ。

十四日 曉より雨降れば、同じ所に泊れり。

十五日 なほ日のあしければゐさるほどにぞけふ廿日あまりへぬる。

十六日 風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に波なくして、いつしかみさき  
といふ所わたらむとのみなむ思ふ。風波ともにやむべくもあらず。



十七日 くもれる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎゆく。  
○中 かくいふあひだに、夜やう／＼あけゆくに、楫取ら黒き雲俄にいできぬ、  
風も吹きぬべし。御船かへしてむといひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いと  
とわびし。

十八日 なほ同じ所にある。海荒ければ、船いださず。この泊、とほく見れども、近く  
見れども、いとあもしろし。かくれども、苦しければ、なにごともおぼえず。

十九日 日あしければ、船いださず。

二十日 昨日のやうなれば、船いださず。皆人々うれへなげく。苦しうこゝろもとなけ  
れば、たゞ日のへぬる數を、今日いくか、廿日卅日とかぞふれば、およびもそ  
こなはれぬべし。

廿一日 卯の時ばかりに船出す。皆人々の船いづ。○中 おほろげのねがひよりてにやあ  
らむ。風も吹かず、よき日いできてこぎゆく。

かばかりの長き陰鬱の大荒を経る初めであるから、「雨降らず」と記して、終に降るべき空  
の景色も降らずに、日が暮れたことを冒頭として、前後十日間の大荒れの模様を簡單に書い

て室津に泊まつて困苦したことを知らせてある所は凡筆の及ぶべき所ではない。

又海賊の恐怖は正月廿一日の條に

かくいひつゝゆくに、船君なる人、波を見て國より始めて、海賊むくいせむといふなる  
ことをおもふ上に、波のまたおそろしければ、頭も皆白けぬ。なぞち八十ちは海にある  
ものなりけり。

わがかみの雪といそべの白波と

いづれまされり沖つしまもり

かちとりいへ。

又廿三日の條に

日照りてくもりぬ。このわたり、海賊おそりありといへば、神佛を祈る

又廿六日の條に

まことにやあらむ。海賊おふといへば、夜中ばかりより船を出してこぎくる云々

廿一日は海上和ぎて嬉しく航海すると思へば、船君は海賊と、航海の憂苦とに心勞するが  
爲めに、頭髮も皆白髪となつたと、魏の韋誕が凌雲臺の額を書くのに恐れたので白髪となつ



た故事を按排して述べた筆力に依つて、日和よき日には旅の困苦と海賊の恐怖とに艱むと云ふ敘述の對照を見よ。殊に當時公用で航海する國守も、海賊の恐怖に脅かされる、狀況に就いて王威の衰へたことを察知すべきである。

#### 第四 風物の鑑賞

##### 風物の鑑賞

土佐の國府を立つて、外洋を迂廻する長途の航海中、貫之の眼に映ずる自然風物の鑑賞は、日記中に數多見えてゐる。流石に歌文を生命とする作者の人柄を窺ひ知るべきものである。殊に、其の文章の洗練の妙は、蓋し和歌より得來つたものであらう。其の二三の例を示せば、まづ正月九日の條に

かくて宇多の松原を行きすぐ。その松のかず、いくそばく、いく千とせ經たりと知らず、もごとくに浪うちよせ、枝毎に鶴飛びかふおもしろしと見るにたへずして、船人のよめる。

見わたせば松のうれことにすむ鶴は

千代のとちとぞ思ふべらなる

とや、この歌は所を見るにえまさらず。かくあるを見つゝこぎゆく。山も海も、皆くれ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと拵取の心にまかせつ。をのこもならはぬはいとも心細し。まして女は船底に頭をつきあてゝ、ねをのみぞなく。かく思へど、船子拵取は、船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふ歌。

春の野にてぞ、ねをばなく、

若すゝきにて、手をきるく、

つんだる菜を、親やまほるらむ、

しうとめや食ふらむ、かへらや。

よんべのうなゐもがな。せにこはむ。

そらごとをして、おぎのりわざをして、

錢ももてこず。おのれだにこず。

これならず、おほかれどかゝず。これらを人の笑ふをきいて、海は荒るれど、心はすこしなきぬ。かくゆきくらして翁人一人たらめ一人あるが中に、こゝちあしみて、物もものしまたはで、ひそまりぬ。



又河内の渚の院の舊蹟を見ては、

かくて船引き上るに、渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、昔をおもひやりてみれば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には松の木どもあり、中の庭には梅の花咲けり。こゝに人々のいはく、これは昔、名高く聞えたる所なり。故惟喬親王の御供にて、在原業平の中將の、世の中にたえて櫻の咲かざらば、春の心はのどけからましといふ歌よめる所なりけり。今興ある人、所に似たる歌よめり。

千代経たる松にはあれどいにしへの

こゑのさむさはかはらさりけり

又ある人のよめる

君戀ひて世をふるやどの梅の花

昔の香にぞなほにほひける

といひつゝぞ、都の近づくをよろこびつゝのぼる。

渚の院の事は「伊勢物語」に見えて有名なものであるが、今更に細かに其の状況を敘して懐古の情を表はした所も、亦文學者鑑賞の一端を認められるではないか。

## 第五 貫之の善政

貫之の善政

延喜天曆の御代は、世に太平の世と稱せられてゐる。然れども、西海には、海賊の横行したことは、既に上文に説いたごとくである。貫之は土佐守となつて彼の國に下つて、吏務鞅掌して治績咸熙まつたことは、想像に難くない。其の部下を愛撫した爲めに、出發の後も土佐の國境を離るゝまでは、皆相擧つて送り來つたことは、日記の上に明徴があるのに據つて知ることが出来る。而も自から奉ずることの極めて薄かつたことは、正月の節供をも一切省略したことに見ても、時流に染まない識見の高いことが窺はれる。たとひ其の身は地方行政の吏務に役せられたとは云へ、自から守ることが堅固なる文學者であつたと仰がれるものである。さて其の部下撫愛の尋常でなかつた例は、日記の發端に

ある人、縣の四とせ五とせ果て、例の事ども皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき處へ渡る。彼此知る知らぬ送りす。年頃よく具しつる人々なむ、別れ難く思ひて、頻りにとかくしつゝ、のゝしるうちに夜更けぬ。

本文に「よく具しつる人々」とは親しく撫愛した屬官等を云ひ「知る知らぬ送りす」は國司



に任はれてゐなかつた人々を「知らぬ人」と云つたので次々に送りに来る人々を擧ぐる爲めの伏案である。是善政の行はれた結果と見なくてはならぬものである。其の知らぬ人と云つたのは廿三日の條に見える通りである。

山ノ康教といふ人あり。この人、國にかならずしもいつかはるゝ人にもあらざりき。これぞ、たゞはしきやうにて、馬のはなむけしたる。かみがらにやあらむ。國人の心の常として今はと見えざるを、心あるものは、恥ぢず來なむ來ける。これはものによりてほむるにしもあらず。

此の後、續々と酒肴を携へて見送りに来る人のことが多く見えてゐるが、今は省略する。但し最後には、九日の條に

つとめて大湊より那波の泊をおはむとてこぎいでけり。これかれたがひに、國の境の内はとて見送りに来る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政らなむ、御館よりいで給ひし日より、こゝかしこにおひくる。この人々の深きこゝろざしは、この海にも劣らざるべし。是より今はこぎはなれて行く。これを見送らむとぞ、この人々どもはおひ來ける。かくてこぎゆくまに、海のほとりにとゞまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えず

なりぬ。岸にもいふ事あるべし、船にも思ふことあれどかひなし。かゝれど、この歌を獨言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども

ふみしなれば知らずやあるらむ

さて、自から奉ずる極めて薄かつたことは、元日の節供を一切省略したことに就いても察せられる。

廿九日大湊に泊れり。醫師ふりはへて、屠蘇ヒキクサ白散酒加へてもてきたり。心ざしあるに似たり。

元日なほ同じ泊りなり。白散をあるもの夜のまとして、舟やかたに、さしはさめりければ、風に吹きならさせて、海にいでて、えのまずなりぬ。芋もあらめも、齒がためもなし、かうやうの物も、なき國なり、もとめしもおかず、たゞ押鮎の口のみぞすふ。このすふ人の口を押鮎もし思ふやうあらむや。今日は京のみぞ思ひやらるゝ。こへの門のしりくめなはのなよしの頭、ひひらぎら、いかにぞなどいひあへる。

いかに節約ではないか。まして繁文縟禮の當時に船中とは云へ、其の節約振が崇敬に値ひす



る。

## 第六 時事の評論

時事の評論

第五に述べたごとく、土佐の國人の習慣として國守の歸京にも見送りせぬ風習であるのを、貫之の政治振の善かつた爲めに、他人から彼此非難されるのを憚らず、送りに來ると云ふことが見えてゐるが、更に二月十六日京都へ着いた時に、鳥坂と云ふ所で、ある人が饗應したのは氣の毒であつたが、皆追従の爲め出發には見送りもせぬ人が、今度歸つて來ると追従するのは現金なものである。然しながら皆一同に返禮はしたと云ふ文は

かくて京へゆくに鳥坂にて、人あるじしたり、かならずしもあるまじきわざなり。立ちてゆきし時よりは、くる時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもかへりごとす。

と見えてゐる。愈故郷の舊館に入つて見れば、甚しく荒廢した狀を見て、

家に至りて、門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。きゝしよりもましていふかひなくこぼれやぶれたる。家をあづけつる人の心もあれたるなりけり。中垣こそあれひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなりけり。されば、たよりごとに、ものは

たえずえさせたり。今宵かゝること、こわだかに物もいばせず、いとほつらく見ゆれど、志はせむとす。さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに、松もありき、五とせ六とせのうちに、千とせや過ぎにけむ。片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。おほかた皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。

保管を托せられたる人の無責任を憤る作者胸中の不平眼前に見る心地がする。然しながら公然自身がぬのみか、童僕等に至るまでも制して堪忍せしめた度量と、高雅なる風格とは忍ばれる。殊にたとひ無責任に打捨て置いたとは云へ、四五年の長い間、保管を頼んだ徳義上其の謝禮は盡す覺悟であると云つた作者の禮節を重んずる意志も判然するが、婉曲ながら「いとほつらく見ゆれど」の一句を味へば、いや／＼ながらなどいふ意が自から言外にほめいてゐる所は、歌道の大先達、國文の名匠たる筆力の遒勁誠に千載の龜鑑とするに足るものであらう。

## 第七 和歌の獎勵

紀貫之が、古今獨歩の歌人として、將又國文の泰斗として千載の下に仰がるゝことは、其

和歌の獎勵



の天才の然らしむることは勿論ながら、亦其の努力の賚らした結果と見なくてはならぬものであると信ずる。今「土佐日記」中に就いて検討すれば、本邦固有の言語美術たる和歌に對する作者の努力は、其の類全く稀なものである。先づ最初に其の獎勵と見るべきものは、正月七日の條に

今日破子もたせて來たる人、其の名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひくゝて、浪のたつなること、とうれへいひて、よめる歌

ゆく先にたつ白波の聲よりも

おくれて泣かむ我やまさらむ

とよめる。いと大聲なるべし。もて來たるものよりは、歌はいかゞあらむ。この歌をこれかれあはれがれども、一人も返しせず、しつべき人もまじれど、これをのみいたがりて、物をのみくひて、夜更けぬ。此の歌主、又またまからずといひて立ちぬ。ある人の子のわらはなる。ひそかにいふ、まるこの歌の返しせむといふ。驚きて、いとをかしきことかな。よみてむやは、よみつべくば、はやいへかしといふに、まからずとて立ちぬる人を待ちてよまむとて、もとめけるを、夜更けぬとにや、やがていにけり。そもくゝいかゞよみたる

と、いぶかしがりてとふ。このわらは、さすがに耻ぢていはず、しひてとへば、いへる歌

行く人もとまるも袖の涙川

みぎはのみこそぬれまさりけれ

となむよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり、わらはごとにては、何かはせむ、おむなおきなををしつべし。あしくもあれ、よくもあれ、たよりあらば、やらむとて、おかれぬめり

此に「わらは」とあるは貫之の子息であらう、下文に「うつくしければ云々」とあるに據つて察せられる。香川景樹は貫之がわざと作つた話であるやうに考へたのは從ひ難い、十八日の條に三十七字の歌を貫之が作つたことを記してあるのと考へ併せて知ることが出来る。又揖取が唄つた俚謠も收めてあることは上文に説いた。

殊に、此の日記以外には委しく知ることの出来ない和歌が、我が邦固有の言語美術であること、其の宣傳に勉めた逸話とが、安倍仲磨の事に就いて次のやうに記してある。正月廿日の條に

昨日のやうなれば船出さず、皆人々うれへなげく、苦しく心もとなければ、たゞ日の經



ぬる敷を、今日いくか、廿日卅日とかぞふれば、およびもそなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寝ず、廿日の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見てや。昔安倍仲麿といひける人は、もろこしにわたりて、歸り來たる時に、船に乗るべき所にて、かの國人、うまのはなむけし、わかれをしてみ、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、廿日の月、いづるまでぞありける。その月は海よりぞいでける。これを見て、仲麿のぬし、我が國には、かゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上なか下の人も、かうやうにわかれをしみ、よろこびもあり、かなしみもある時には、よむとて、よめりける歌

青らなばらふりさけ見れば春日なる

みかさのやまにいでし月かも

とぞ、よめりける。かの國の人、さゝしるまじくおぼえたれど、ことの心を、男文字にさまを書きいだして、このことば傳へたる人に、いひ知らせければ、心をやさしく得たりけむ、いと思ひの外になむめできる。もろこしと、この國とは、ことばことなるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

と見えてゐる。「古今集」の羈旅に、「もろこしにて月をみてよみける安倍仲麿、天の原云々とありて、次の詞書に

この歌は昔仲麿をもろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年をへて、えかへりまうでござりけるを、この國より又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたりけるに、めいしうといふ所の海べにて、かの國の人、むまのはなむけしけり。よるになりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるをみてよめるとなむ、かたりつたふる。

と見えてゐる。此も貫之の手に成つた文であらうが、日記の文では、更に和歌が、我が邦固有の風であることを強調してゐる所は、貫之の和歌に對する理想が「古今集」勅撰の當時よりも、更に大和魂の活用に依つて向上したものであらう。貫之は實に我が和歌の權化である。

## 第二節 紫式部日記

缺本説―抄本説―脱漏説―「源氏物語」との優劣論―榮華物語との關係

「紫式部日記」二卷「源氏物語」の作者紫式部が一條天皇の中宮に奉仕の際の狀況を中心



として書いた日記である。而し寛弘五年の秋から同七年正月まで約三年に涉つてゐるが、六年の記事は只正月の記事ばかりであり、又女房の人物評や作者の述懐などが雜つてゐるのを見て、今に傳はるものは其の完本ではないと云ふ説、又は元來數十卷あつたものから作者が抄出したものであらうといふ説などもあるが固より證據はない。故に此には日記に表はれてゐる特色の二三を吟味するに止める。但し此の日記に據つて寛弘頃の中宮御産前後の状況を詳かに知ることが出來、又、當時に名高い女房達の性行並に作者が其の夫に先だたれて後の生活状態、感想、若しくは女子たるもの、修養等に對する作者の意見などを明かにする唯一の資料となることが少なくないのは、誠に貴重なものとなつてはならぬ、世間往々「源氏物語」の文章と比較して、元より洗練せられた「源氏物語」に比すべきものでない」とか「源語の莊麗優美なるに及ばざれども、その筆をとりて思ふ儘に記して少しも苦心のさま見えざる點に至りては、大にみるべき處あり」とやうに此の日記を貶してゐる傾向が多いのは、恐らくは皮相の看であらう。惟ふに、此日記の主とする所は其の名の示すがごとく「日記」であつて「物語」ではない。日記には日記の特質があり、物語には物語の形式がある。之を同一に看做すことは決して篤論とは云ふことが出來ぬ。又「榮華物語」「初花」の卷に此の日記

の文と同一の文章を引いた所も所々に見えてゐるのは、互に映發して得る所も少なくない。蓋し作者の文章が世に珍重せられた一端が窺はれる。

### 第一 中宮御産 皇子御誕生

中宮御産

中宮は道長の長女彰子、一條天皇の中宮となつて後一條天皇を生む。時に寛弘六年九月十一日であつた。此の御産の前後の状況を詳細にし記たのが、此の日記の上卷に盡してある。其の御産の前に、中宮は道長の邸土御門殿に移り給ひて五壇の御修法の有様から、九月に入つて白い御装束に改めらるゝ次第、御授戒、御物怪など例のごとく、九月十一日皇子御誕生、御湯殿其の他の御儀式、三日、五日、七日、九日の御産養、十月には行幸還幸、十一月、御五十日の御儀式まで次第のまゝに記してある。尙ほ中宮の御參内から若宮の御戴餅のごときに至るまで、簡明な敘述は此の作者にして始めて能くするものであらう。まして彼の挿繪と對照しつゝ讀みもて行つた當時の人々の心地、將又如何計りの感興が湧いたことかは、今日に傳はる蜂須賀侯爵家久松子爵家の「紫式部日記」を見て、思半に過ぐるであらう。御五十日の御儀式は尤も鄭重であるが、是に先だちて皇子御誕生の時の状況を述べた文章の一節を左

皇子御誕生



に擧げれば

うまの時 ○寛弘六年九月十一日正午 に空はれて、朝日さしいでたる心地す。たひらかにおはしますうれしさのたぐひもなきに、男にさへおはしましけるよろこび、いかゞはなのめならむ、昨日しをれくらし、けさの程、朝霧におぼほれつる女房達など、皆たちあかれつゝやすむ皇子御誕生に際して人々の満悦を極めて流暢に、而も連日の杞憂を拭いて取つたやうな氣分を晴れたる月日の空の景色を假りて

「朝日のさし出でたる」と云ひ、或は「朝霧におぼほれつる女房」と云つて茫然としてゐた女房の意中を察したあたりの筆つきを見よ。「源氏物語」に及ばぬとか、「思ふまゝ」に記して少しも苦心のさまの見えぬ」との評は果して妥當か。

又「御五十日の御産養」の莊重を敍した一節を示せば、

御五十日は、霜月の朔日、例の人々の仕立て、のぼりつどひたる、御前の有様、繪にかきたる物あはせの所にぞ、いよよう似て侍りし。御帳の東の御座の際に、御帳を奥の御障子より庇の柱まで、ひまもあらせずたてきりて、南面に、御前の物は参りすゑたり。西によりて、大宮のおもの、例の沈の折敷、何くれの臺なりけむかし。そなたのことは見ず、御

まかなひ、宰相の君、讃岐取りつぐ。女房も釵子元結などしたり。

若宮の御まかなひは大納言の君、東によりてまゐりすゑたり、小さき御臺御皿ども、御箸の臺、洲濱なども、雛遊の具と見ゆ、それより東の間の庇の御簾すこしあげて、辨の内侍、中務の命婦、小中將の君など、さべいかざりぞ、とりつきつゝ参る。奥に居て、くはしうはく見侍らず。今宵少輔めのと色ゆるさる。ことしきさまうちしたり。宮いだき奉れり。御帳の中にて、殿の上、抱きうつし奉り給ひて、ゐざりいでさせ給へり。火影の御様、けはひことにてめでたし。赤色の唐の御衣、地摺チゾの裳、うるはしくさうぞき給へるも、かたじけなくもあはれにも見ゆ。大宮は、葡萄染の五重の御衣、蘇芳の御小袿奉れり。殿、もちひは参りたまふ。上達部の座は、例の東の對の西面なり。今二所の大臣は、参り給へり。橋の上にあゐりて、又酔ひみだれて、のゝしり給ふ。折櫃物、籠物どもなど、殿の御方より、まうち君達、とりつゞきてまゐれる、高欄につゞけて、すゑわたしたり。たちあかしの光の、心もとなければ、四位の少將などを喚びよせて、紙燭さゝせて人々は見る。○中略げにかくもてはやしきこえ給ふにこそは、よろづの飾りも、まさらせ給ふめれ。千代もあえましく、御ゆく末の、かずならぬこゝちにだに、思ひつゞけらる。



當時の御産養は三日五日から續々行はれた中でも五十日の御産養が盛大なものであつた。

### 第一 中宮と齋院

中宮と齋院

作者が中宮に奉仕の頃、村上天皇の皇女選子内親王は大齋院と申して賀茂の齋院にましました。圓融天皇の御時から後一條天皇の御世まで五朝齋王であらせられたから、極めて豪華な御生活であつたので、其の女房達も皆意氣揚々と振舞つた。中將の君と云ふ人は、齋院の祐筆格で勢力があつた所、其の人の書いた消息を作者が見て、餘りに傲慢なけはひがあると見た評から一轉して齋院と中宮との御性格を忌憚なく月旦した文は、此の日記の中心とも見るべきものである。さて又其の事については、中宮の女房達の歌のよみ方に就いて月旦を試みたのも、亦作者の識見を窺ふべき一端である。然るに、世間では其の女房達に對する評語を人物評と誤解して、或は驕慢であるとも、嫉妬心が見えてゐるとも、自己の才藝を矜つてゐるとも云ひ、又は表裏反覆人格疑はしともいふやうな論斷を下すものがあるのは、頗る從ひ難いものと云はねばならぬ。今、中宮方の女房中、和泉式部、赤染衛門、清少納言の三人の中で、清少納言の歌文章に就いての一節を示せば

清少納言こそ、したりがほに、いみじう侍りける人、さばかりさかしだち、眞名かきちらして侍るほども、よくみれば、まだいとたへぬことおほかり、かく人にことならむと、思ひこのめる人は、かならず見おとりし、行く末うたてのみ侍れば、まんになりぬる人は、いとすごう、すゝなるをりも、ものゝあはれにすゝみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじく、あだなるさまにも、なるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。

清少納言の文才は、今も世に喧傳せられてゐることは何人も周知のことである。但し餘りに奇を衒ふ傾向のある人は、失敗の多いものであると云つて、清少納言の人物を戒めたのは右の文の通りである。果せるかな。清少納言は終に「死馬の骨を買はずやありし」と云ふまでに零落した。此の文は清少納言の歌文に就いて、其の前途の豫言をなしたかの觀がある。

### 第三 女子の修養

女子の修養

作者は若宮の御戴餅のついでに、女房たる大納言の君以下十人の裝束、容貌、志操等に就いて評論を試みた文章は、平易の中に凛とした底力がある。其の文章の末に於て、女子の修



養の難いことを述べたものには、當時の女子の長短が窺ひ知られる。其の一節を示せば

かういひくゝて、心ばせぞ難う侍るか。それもとりくゝに、いとわろきもなし。又すぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも、皆具することは難し。さまざまいづれをかとるべきと、覺ゆるぞおほく侍る。さもけしからずも侍ることゝもかな。

右の文意は、明かであるが、「さもけしからず云々」と云ふのは、忌憚なく人々の評論を試みるのは不遜な次第であると、特に自からの評言を自身で辯解したのは、蓋し評言の體を得たものであらう。

又更に女子の難なきが世に得難いことは、「源氏物語」の品定にも、所々に記してあるが、此の日記には、極めて詳細に敍した文章があるが、餘りに長文であるから、此には擧げない。只其の一節に

すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどやかに、おちぬるを、もとゝしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく、うしろやすけれ。

と云ふ文章がある。又

もしは、色めかしく、あたゝしけれど、本性の人から、くせなく、かたはらのため、見えにくきませずだになりぬれば、にくうは侍るまじ、我はとくすしく、口もちけしきことくゝしうなりぬる人は、たちゐにつけて、われよういせらるゝほどに、その人には、めとゝまる。めをしとゝめつれば、かならずものをいふことばの中にも、きとゐるふるまひ、たちていくうしろでにも、かならずせは見つけらるゝわざに侍り。物いひすこしうちあはずなりぬる人と、人のうへうちおとしめつる人とは、まして耳も目も、たてらるゝわざにこそ侍るべけれ。人のくせなきかぎりは、いかで、はかなきことのはをも、きこえじとつゝみ、なげのなさけつくらまほしう侍り。

とも見えてゐる。如何に經驗に長けた修養法であらう。更に進んで

人すゝみて、にくいことしいでつるは、わろきことを、あやまちたらむも、いひわらはむにはばかりなうおほえ侍り、いと心よからむ人は、我をにくむとも、われはなほ人をおもひうしろむべけれど、いとさしもえあらず、慈悲深うおはする佛だに、三寶を誹る罪は、淺しとやは説き給ふなる。まいて、かばかりに、濁深き世の人は、猶つらき人はつらかりぬべし。それをわれまさりていはむと、いみじきことの業をいひつけ、對ひみて、け



しきあしう、まもりかはすとも、さはあらず、もてかくし、うはべはなだらかなるとのけろめぞ、心の程は、見え侍るかし、

右の文意を按じて、作者が自から修養の工夫を凝らしたことは明白になるであらう。

#### 第四 作者の韜晦

作者の韜晦

世の論者「一といふ文字をだにかきわぬし侍らず、いとてづつにあさましく侍り」とある文を以て、表面謙讓を装つて居るものと見られると云ふ。是の文は頗る理由あることで、決して自負心があるのを表面謙讓を装つて見せるとは云ひ難いものである。是は作者が「日本紀の御局」などいひ囃されたの聞き知つてから、頗る其の才を認められぬやうにと韜晦した一端を述べたもので、理由もなく謙遜したと見ることは出来ぬのである。其の文は

それを、をとこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめると、やうく、人のいふも聞きとがめて後、一といふもじをだに、かきわたり侍らず。いと手づつに、あさましく侍り。よみしふみなどいひけむもの、めにもとどめずなりて侍りしに、いよくかゝること、聞き侍りしかば、いかに、人もつたへきして、にくむらむと、

はづかしさに、御屏風のかみに、かきたることをだに、讀まぬ顔をし侍りしを、宮の御前にて、文集の所々讀ませ給ひなどして、さるさまのこと、しろしめさせまほしげにおぼいたりしかば、いと忍びて、人の候はぬもの、ひま／＼に、一昨年の夏頃より、樂府といふふみ、二巻をぞ、しどけなくかうをしへたてきこえさせて侍るも、かくし侍り。宮○中宮定子も忍びさせ給ひしかど、殿も内もけしきを知らせ給ひて、御ふみをも、めでたうかゝせ給ひてぞ殿は奉らせ給ふ。まことに、かうよませ給ひなどすること、はたかものいひの内侍は、ま聞かざるべし。知つたらば、いかにそしり侍らむものと、すべて世の中、ことわざ繁く、憂きものに侍りけり。

かくまでに風評に上つた際に、傲然と構へるものは、恐らく男子にもあるまい。只單に表面無學を装うた女であると斷ずることは苛刻ではあるまいか。尙ほ、日記中に、「自己の才學を矜つた證據が見えるから、作者は、自負心があり、虚榮心があつた」と云ふ評論も聞いてゐるが、蓋し各自其の見る所に従つて、見る所も異なるのであらう。



## 第十四章 枕草子

枕草子

「枕草子」三卷 清少納言の作たることは其の跋文に據つて明かである。本来「清少納言」とも「清少納言記」とも云つてゐたが、後には「枕草子」といふ名が、一般に行はれることゝなつた。

我が邦に假字物語が出来てから、續々物語が多く出来た。又「日記」も「紀行」も出来て、ますます國文界は盛況を呈したが、此等の外には、別に新しい形式の作品は、世に表はれなかつた。然るに、一朝、清少納言の手に依つて「枕草子」が、隨筆の體を以て、新らしく生れ出た事は、如何ばかり、當時の驚異であつたことであつたらう。隨筆の開祖「枕草子」が出現して、我が邦「情操物語」の大作「源氏物語」と相並んで、我が國文界の雙璧と仰がるゝに至つたことは、洵に空前の奇觀と謂ふべきである。一條天皇が、「朕不徳といへども、唯四人を得る一事は、亦前朝に愧ぢざるに庶幾し」と宣うたと傳へてゐるのは、必ずしも

納言四人 齊信、公任、行成、源俊賢 のみを云ふのではあるまい。

### 第一 清少納言

清少納言

「清少納言」は清原元輔の女、深養父の曾孫である。清少納言と云ふのは所謂「呼名」で、其の本名は詳かでない。清は「清原」に因る名とは思はれるが、「少納言」の稱は何に因つたか、未だ考へ得ない。清少納言は、一條天皇の皇后定子の宮に奉仕して破格の寵遇を賜はつたことは枕草子の記事で判然たるものがある。晩年零落の事は古事談に見えてゐる。「枕草子」は、實に皇后宮奉仕の際に成つたものである。

抑、清少納言は、所謂男勝りの女丈夫とも云ふべき性格の持主で、而も文才横溢、古今獨歩と云ふべきものである。當時に相並んで我が邦の大文豪紫式部があつて、「源氏物語」を書いたが、式部の人となりは、溫平として玉のごとく、而も當時の社會相を洞察して、人生の根本義を把握してゐたから、徒に人と争ふことは露ばかりもなかつた。然るに、清少納言は、剛毅にして、氣を負ひ、才を恃み、強きを挫き、弱きを扶ける任侠の風があつたから、當時に時めく公卿でも、殿上人でも、一旦、其の虚に乗ずれば之を粉碎せずんば止まざるを



以て快とした。蓋し當時稀に見る女傑であるといはねばならぬ。故に其の文章に於ても、式部の文章との相違は、亦其の人格の相同じからぬがごとく、各々其の獨特の長技を發揮してあるから、容易に其の軒輊を加ふべきものではない。否固より軒輊あるものではない。

## 第二 枕草子の由來

枕草子の由來

『枕草子』の出來た顛末は、清少納言が書いた『枕草子』の終りの段に、

宮の御前に、内の大臣の奉り給へりし御草子を、「これに何を書かまし。上の御前には、史記と云ふ文を書かせ給へる」など宣はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申し、かば、「さば得よ」とて、賜はせたりしを、あやしきを、こじや何やと、盡きせずおほかる紙の數を書き盡さむとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかるや。

と見えてゐるので、此の書の出來たことは自から判明するであらう。「枕」と申し上げたのは、略語で、「枕の草子」に致しませうと云ふ意。當時、一般に話の種を「枕言マクラコト」と云つた所から、枕言を書く原稿に致しますと云つたことである。清少納言は紙に最も深い趣味を持つてゐたことが、中宮にも御承知であらせられたから、では其方に遣ると云つて下された。

之を書くには、何處で書くかと云ふことも、最終の文に見えてゐる通り、非番で里邸に下つた時に書いたと云ふ。尙ほ又、其の書き方に就いて苦心したことも其の條に記してある。さて又、「草子」と云ふのは「草稿」の意である。當時「草子」と云つたのは、紙を重ねて、其の端を綴ぢたもので、「卷子本」や「帖」のやうなものでないのである。又、「草紙」とも書くのも同じである。

## 第三 文體

文體

枕草子の文體研究に就いては、諸先輩が、未だ眞の研究を盡されてゐない。從來、枕草子は、唐の李義山の雜纂に倣つたものであると云ふのが、殆ど標準のやうになつてゐる。此の説は全く皮相の見である。惟ふに、古今獨歩の鬼才清少納言は、いかで古人の糟粕を甜るのであらうか、請ふ看よ、彼の跋文に中宮が「上の御前では史記を書かせ給ふ」と仰せられた言の未だ終らぬ中に、「枕にこそはし侍らめ」と大膽に切り出した勇氣と自信とは、決して他の障壁に倚るものではない。清少納言が、草子を書くに當つて、不圖、頭に浮んだことは、「綱目式」で書いてやれと云ふ何物かの暗示を得たに相違ない。發端の文章を如何なる



體に敘述してあるかを見よ。

春は曙。やう／＼白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山にはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。きいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風の音蟲の音など、いとあはれなり。冬は、つとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず、霜などのいと白く、又さらでも、いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

従來、此の四季の敘述法を解くもの、説には、「春は曙」「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」に對して、曙の下、をかしを略けり、夏はよるの下、をかしを略けり、「秋は夕ぐれ」ゆの下、をかしを略けり。「冬はつとめての下、をかしを略けり」と註してある。是最も作者の本意を曉らぬ誤解の甚しいものである。

抑、發端の敘述法は所謂、「綱目式」を用ゐるのである。即ち

春は（何ぞ）（答へて曰はく）曙（なり）

夏は（何ぞ）（答へて曰はく）夜（なり）

秋は（何ぞ）（答へて曰はく）夕ぐれ（なり）

冬は（何ぞ）（答へて曰はく）つとめて（なり）

斯くごとく、自問自答のごとく、先づ綱を立て、一句を整へ、さて、其の「目」には

「春は曙なり」と云つた説明に、

やう／＼しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる（をかし）

「夏は夜なり」と云つた説明に、

月の頃は更なり。

螢飛びちがひたる（をかし）

雨などの降るさへ（をかし）

雨などの降るさへ「をかし」の「をかし」が、上掲の例のやうに呼應する文脈である。

「秋は夕ぐれなり」と云つた説明に、



夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねところへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへ（あはれなり）

まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、（いとをかし）日入りはてて、風の音、蟲の音など（いとあはれなり）

第一節には「あはれなり」、中間に、「いとをかし」

三節に「いとあはれなり」と三度語を代へて敍した筆つきを曉るべきではないか。

冬は（つとめもなり）と云つた説明に

雪の降りたるは（いふべきにもあらず）

霜などのいと白く、またさらでも、いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、（いとつきづし）

晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火桶の火も、白き灰がちになりぬるは（わろし）

初に、「いふべきにもあらず」、中では「いとつきづし」と云ひ、終には之に反して（わろし）と云つて文を異にして結んでゐる。是が如何にして「をかし」を略したと言

へるであらうか。妄言も亦甚しいものである。

殊に、發端の文字 中、一つも漢語を用ゐてない。皆國語のみである。作者は國語のみでも、斯のごとく、堂々たる文章が出来ること云ふ模範を示したものはあるまいか。先輩未だ此の事に一指を染められてゐないのは、頗る不思議である。

#### 第四 清少納言の機鋒

清少納言の  
機鋒

清少納言が、曾て白馬節會の拜觀の析、女孺が得意然と殿上に振舞ふ狀を見て、

いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝ、

と宮仕の生活を羨んだものであつたが、一朝中宮の御召に由つて宮仕に出で立ち、其の非凡な才華を認められて、殊遇を負ふやうになると、彼の女孺を羨んだ元輔の娘とは全く別人のごとき地位に據つて、宮中に俾倪した有様は、亦面を向くべきものもない。而して俄に、又は佛典の本文を基礎として、何人の難題にも、即時に應酬する機鋒の鋭敏なることであつた。清少納言が何事に當つても、即時に和漢の故事、佛典の本文に據つて縦横無盡に薙ぎ立てる舌の峻烈は、深く中宮の御趣味と合致して、清少納言と中宮とは忽に意氣投合、中宮



は清少納言に由つて立ち、清少納言は中宮に由つて生きた、「君臣水魚」と云ふ語は正しく中宮對清少納言に適用すべき名句である。當時に傑出したる。文人才媛多しと雖ども、清少納言のごとく禪機を把握したものは斷じて一人もない。頭中將が「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、末はいかにく〜とあつた返事に、「草の庵を誰か尋ねむ」とすびつの消えたる炭として書いたのは、「盧山夜雨草堂中」と云ふ『白氏文集』の一句を和歌に譯した腕のすごさのごとき、又、小白河殿の法華八講に、中途で清少納言が退出するのを義懷權中納言が見咎めて、法華經方便品中の「如是増上慢人、退亦佳矣」と云ふ文句を踏まへて「や、まかりぬるもよし」と言ひ掛けたのを、尻目にかげながら、「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と、同じ方便品中にある「會中有比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等、即從坐起、禮佛而退」を譯して、御自身も、その五千人の仲間に入り給はぬわけもあるまいと、一蹴した、才氣の煥發、前後に其の類鮮ないものであらう。殊に世に名高い函谷關の故事で、行成と應答した「夜をこめて」の歌や、闇夜に御簾の下から竹の枝を挿し込まれて、お此の君と云つた敏捷な活動は殆ど應接に違あらずである。彼の雪の晨、中宮が「少納言よ香爐峯の雪は」と問はせ給うたに、御格子あげさせ、御簾高く捲きあげたれば、笑はせ給ふ

書いて澄まし込んだなどは心憎き限りではないか、最後に今一例を加ふれば、隆家卿が、珍らしい扇の骨を手に入れたと自負なされたのを中宮の御側で聞いてゐて「海月の骨」と云つたことは

中納言參らせ給ひて、御扇たてまつらせ給ふに、隆家こそいみじき骨を得て侍れ。それを張らせて參らせむとするを、おほろけの紙は張るまじければ、もとめ侍るなりと申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべて、いみじく侍り。更にまだ見ぬ骨のさまなり」となむ人々申す。まことにかばかりの侍らざりつ」と、言高く申し給へば、「さては扇のにはあらで、海月のなり」と聞ゆれば、これは隆家がことにしてむとて笑ひ給ふ。

と云ふ敘事の巧妙、すら〜と淀みなく書かれたのは、當時の對話もさこそと聯想せられ、又殊に隆家が自慢げに言ひ切つたことを「言高う」と云つてゐる文勢は、隆家の諷子に乗つた様子が、目に見るやうである。其を眞正面から海月の骨と打込んで意表に出た膽力は、敵の虚に乗じて只一打に斬り棄てた感があるではないか。

要するに清少納言が、何人に對しても、其の言ふ所、語るふし〜に、打込む機會があれ



ば、透かさず斬り込む勇氣と膽力とは、實に絶えてなくして稀にある劍道の達人の境地であらう。

### 第五 敘事の熱烈

敘事の熱烈

清少納言は固より直截簡明なる心境を以て事に當り物に處する人、遠慮もなく斟酌もせぬ習性であるから、時として人を人臭いとも思はぬ形跡が多い。然しながら、強ひて悪氣があつて故意にさうするのではない。故に一旦、此の事は復二度と世にあるべからざる狀景であると思へば、客觀視しては見てゐない。其の身が、其の儘に其の畫中の人物となり切つた熱情を以て文を行るのが、清少納言獨特の長技でもある。第九十段淑景舍東宮に參り給ふほどの事など」の條は、頗る長文であるから此には擧げぬが、此の文は中宮の御父道隆一門の榮華の頂點を描寫した絶大の筆である。

又二百九十七段に、

松の木だち高う、庭廣き家の、東南の格子どもあげ渡したれば、涼しげに透きて見るに身舎に四尺の几帳立て、前に圓座ワラフダを置きて、三十餘ばかりの僧の、いとにくげならぬ

が、薄墨の衣、羅の袈裟など、いとあざやかに、うちさうぞきて、香染の扇、うちつかひ、千手陀羅尼讀みぬたり

と書き出して、物の怪に惱む人を加持する狀況を仔細に描いた文には氣力が満ちて、物怪調伏の場面と、加持僧すたく顧りもせず立つて行く高尚な態度を手取るやうに書かれてゐる。他の物語にも此のやうな類は多くあるが、清少納言でなくては描寫の出來ないと思はれる文である。尙ほ、清少納言得意の手段で、位地の高いもの、或は相當に、威勢のあるもので、而も其の人が少し間の延びた人だと思ふと、容赦なく翻弄するのは、氣の毒なほどである。之に反して全く他に援助するものもない弱者に對しては、眞劍になつて我が身のことのごとく同情して、之を救ひ出す俠氣に富んだ文が屢々出て來る。是皆、清少納言の人となりが窺はれる證據である。第八十六段の藤侍從公信をして都大路を走らせたるごときは前者の一例であり、翁まろの勅勘を自然に赦さるゝやうに憐んだごときは、後者の一例である。畢竟、常人の見て褒むるものは之を貶し、凡人の捨てゝ顧みぬものは之を揚げるやうなことは、作者の常に怡ぶ所であつた。是は底意地の悪いのではない。天稟の慧眼、常人を超越した觀察の高さが致す所である。



## 第六 歌枕の資料

「枕草子」は其の名の示すがごとく、あらゆる話の種本である。但し、其の中に「春は曙」を始めとして、「山は」、「峯は」、「海は」、「木の花は」、「草の花は」のやうに「何々は」と題して、同類のものを見聞の及ぶ限り其の條下に網羅したのは、全く歌を詠む爲めの資料としたものである。同例に依つて、世に、「物盡し」といはれる、「心ときめきするもの」、「にげなきもの」、なまめかしきものごとく、「何々のもの」と擧げてあるのも、亦歌を詠むものに、其の骨子の捉へ方を教へたものである。而して、其の作例として、特に歌を中心とする挿話を雜へたのは、作者の深意の存する所である。此の注意を以て此の書を読むものが、玩索して得ることがあつたら、蓋し作者の本意に違はないものと云ふことが、出来るであらう。

## 第七 跋文の眞意

第三百段の「物くらうなりて」の一章は作者が、此の草子を書いた顛末と自己の意志とを

表明したものである。然れども、中宮に奉るものであるからと云つて正面から堂々とは述べないで、

只心一つ、におのづから思ふことを、たはぶれにかきつけたれば云々

と、大に謙遜な口調で表面は逃げてゐるが、裏面には、自己獨特の觀察も、主張も、見解も、抱負も、自信も、確にあつて始めたもので、等閑に書き放したのではないと云ふ責任を述べてあると見なくてはならぬ。而も老獪な筆法で

はづかしなども、見る人は宣ふなれば、いとめやすくぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをもよしといひ、譽むるをもあしといふは、心のほどぞ、おしはからるれ。たゞ人に見えけむぞ、ねたきや。

と云つて、世間では、人の善惡を正面から言はずに、反對に裏から云ふ癖があるから、今日の人の評に善い文章だと譽められるのは、悪いといふ裏であるかも知れぬ。畢竟、左中將に、發表前に見られたのが、憎らしく残念であると、結んだのは、實に他人の眞似の出来な書き方である。後世、「徒然草」が、此の文章に據つて發端を書いたことは、最も牢記しなくてはならぬ問題である。



### 第十五章 本朝文粹

本朝文粹―續本朝文粹―本朝文粹目次―續本朝文粹目次―本邦  
創作の願文及び表白

本朝文粹

續本朝文粹

「本朝文粹」<sup>モンズキ</sup>十四卷 總目錄一卷 出雲守藤原明衡が編集する所。嵯峨天皇弘仁年中から、一條天皇寛弘年中まで十五代、二百餘年に渉る文人才子の漢文を採録し、部類を分けて編集してある。其の體は蓋し「文選」「唐文粹」に擬したものである。而して此の集には、菅三品、源英明以下五十餘人、貞觀元慶以後天曆の頃に輩出しれ文名高いもの、作品が載せてある。又「續本朝文粹」は十三卷、藤原季綱の編、久しく寫本のみで傳はつてゐたのが、近來活字本で世に行はれるやうになつた。此の集には「本朝文粹」以後の文人の作品を集めてある。源師房を始め藤原資光に至るまで三十八人に及んでゐる。中に就て、大江匡房は「江大府卿」として其の作多く、藤原敦光は學問該博、能文の譽あり、上表は多く其の手に係つてゐる。只往々和習を雜へたのは、古人に及ばずと云はれてゐるが、當時の文の支那の故事を

用ゐて對偶に巧妙なることは古今無比と云はれてゐる。今左に其の目次を擧げる。

本朝文粹目次

#### 卷一

賦

天象

水石

樹木

音樂

居處

衣被

幽隱

婚姻

雜詩

古調

越調

字訓

離合

廻文

雜言

三言

江南曲歌

#### 卷二

詔

勅書

勅答

位記

勅符

官符

太政官符

意見封事

#### 卷三

對冊

#### 卷四

論奏

表上

#### 第十五章 本朝文粹



攝政關白辭職表

表下

下辭太政大臣

卷五

表下 附辭狀

辭左右大臣 致仕

辭封

返隨身 辭女官

辭狀

奏狀上

建學館 佛寺

卷六

奏狀中

申官爵 申讓爵

申學問料

卷七

奏狀下

左降人請歸京

省試詩論

書狀

卷八

序甲

卷九

書序

詩序一

天象 時節

山水

序乙

詩序二

帝道 人倫

人事

祖饒 付蕃客 饒別 論文

居處 別業

布帛

燈火

卷十

序丙

詩序三

聖廟 法會

山寺 在僧房

木

卷十一

序丁

第十五章 本朝文粹



詩序 四

草

鳥

和歌序

題付序

卷十二

詞

行

文

讚

論

銘

記

傳

牒

祝

起請

奉行

禁制

忘狀

落書

卷十三

祭文

呪願

表白

發願

知識

廻文

願文 上

神祠修善

雜修善

卷十四

願文 下

追善

諷誦文

同請文

續本朝文粹  
目次

又「本朝續文粹」の目次は、大體「本朝文粹」に同じであるが、別に設けた體もある。

本朝續文粹

目次

卷一

賦

古調詩

越調

卷二

詔

位記

勘文

卷三

策

卷四

表 上

卷五

表 下

卷六

奏狀 上

卷七

奏狀 下

卷八

序 上

詩序

卷九

序 中

卷十

序 下

卷十一

詞

讚

論

銘

卷十二

祭文

表白

願文

第十五章

本朝文粹



## 卷十三 追善

本邦創作の  
國文

「本朝文粹」は『文選』に擬して編集してあることは上文にも述べたが、此の中で、我が邦に於て發明せられたのは「願文」<sup>ゾウシモン</sup>の一體である。「願文」は神社に對する修善文、又佛事に對する供養文である。共に皆傑作が多い。是は當時神佛の信仰頗る厚く鄭重の限りを盡した反映である。又續文粹には祭文の一種に「表白」<sup>ヒヤウヒヤク</sup>がある。續文粹中、最も能文の譽高いのは、藤原敦光である。敦光は明衡の孫、敦基の子で文章博士となり年八十三で卒した。學問該博で、能文の譽があり、其の時の詔勅上表は多く其の手に成つたものである。然れども、其の文は往々國文の語を雜へて漸く和臭を益して來たので、古人に及ばずとの評がある。唯當時の文は、支那の故事を慣用し、對偶に巧なことは、後世の學者の及ばぬものであると云ふ。斯のごとき一種の文體が、即ち「往來物」の始である。但し純漢文の中に國文の語を雜へるのは既に上古から起つてゐるものであるが、此の時からいよいよ、甚しくなつたのである。

表白

## 第十六章 明衡往來

明衡往來—雲州消息—萬葉集の尺牘—本朝文粹の尺牘—明衡往來の消息

上古の書簡はすべて純粹の漢文であつたが、其の體は、支那古代の尺牘で、些も國語が雜へてない。萬葉集五に見えてゐる藤原房前の書簡に就いて知ることが出来る。平安朝に入つて紀長谷雄、大江朝綱の「書」に據れば、其の文誠に本格的漢文である。然るに中世遣唐使が止んでから、漢字を用ゐる方法不規則になつて、顛倒錯置を生じ、又往々國文を雜へて書くことゝなつて、遂に「往來書簡文」の一體を循致した。

往來書簡文の法式を示す爲めに始めて「明衡往來」が出来た。「明衡往來」は出雲守藤原明衡の著である。正月から十二月までに行はるゝ公私の用務を漢文に國語を雜へた文章二百餘篇を作つて書簡文の模範を示す爲めに、始めて上中下三卷の書を作つた。之を「雲州消息」又は「明衡往來」と呼んだ。此が「消息」又は「往來」の元祖である。此の書は「群書類從」に收めてある。當時の男子は、皆悉く公式には此の體に倣つて一切の用務を辨じたが、女子

明衡往來



は別に口語のまゝを平假字で、すらく〜と書いて、能く言はうと思ふことを十分に書き表はして往復の用に供した。此に於て男子の書簡と女子の書簡と兩途となつたが、此も亦「消息」と云つた。然るに、男子も此の體に倣つて公式でない用向には巧に此の「消息」を書いたことは、「源氏物語」にも多く其の例が見えてゐる。今左に彼の「萬葉集」の「尺牘」と並に本朝文粹の「尺牘」及び「雲州消息」の文例とを左す。

萬葉集五

跪承芳音、嘉懽交深。乃知龍門之恩、復厚蓬身之上。戀望殊念。常心百倍。謹和白雪之什。以奏野鄙之歌。房前謹狀

許等騰波奴、紀爾茂安理等毛、和何世古我、多那禮乃美巨騰、都地爾意加米移母。

十一月八日附還使大監

謹通尊門記室

萬葉集五

宜啓。伏奉四月六日賜書。跪開封函、拜讀芳藻。心神開朗。似懷泰初之月。鄙懷

萬葉集の尺牘

本文粹の尺牘

除祛。若披樂廣之天。至若下羈旅邊城、懷古舊而傷志。年矢不停、憶平生而落淚。但達人安排。君子無悶。伏冀朝宣懷翟之化。暮存放龜之術。架張趙於百代。追松喬於千齡。耳兼奉垂示、梅花芳席、群英擒藻、松浦玉潭、仙媛贈答、類杏壇各言之作。疑衡阜稅駕之篇。耽讀吟諷、感謝歡怡。宜戀主之誠。誠逾犬馬。仰德之心、心同葵藿。而碧海分地。白雲隔天。徒積傾延、何慰勞緒。孟秋鷹節。伏願萬祐日新。今因相撲部領使、謹附三片紙。宜謹啓不次。

天平二年七月十日

本朝文粹七「書」類

醍醐天皇奉答法皇請停尊號書

紀納言

諱謹言。伏奉慈旨。被告入道兼嫌尊號悲。悲感之腸、一時九廻。但至停號、不悲甘。世尊猶有十號。上皇遂無一累。實封不受。虛稱何勞。仰願大慈悲、留此排拒。諱謹言。



本朝文粹七 奉後江相公書

大江朝綱

謹言。有所勞。不能隨例。乍承揚庭之期。似無參向之志。抑義實文華。是君家之舊物。春風秋月。亦君家之老奴也。斑竹筆。大樣墨。爲充新用。各一雙謹奉之。願累葉之露驛。早擒六代之風雲。不具謹言。

年月日參議大江朝綱

明衡往來 上

近曾罷向北野邊。有荒蕪之蓬屋。控駕熟視庭前。紅梅開敷。獨立開柴戶。至其所。青苔鋪砌。小松當窓。蕭索之氣。頗動中心。詳問其主。前朝之名物也。芳談之間。日景漸暮。所陳舊事足斷腸矣。他日相伴藤亞相。可赴侍。暫絕洛下之奔營。令同道給如何。

二月 日

中務大輔

謹上備後前司殿

明衡往來の  
消息

明衡往來 中

御佛名之間、可企參仕之由、相存之處。月迫之習、云々方々公事、云元三料營、亂暇不候之間、實以罷退畢。就中聽聞之事、所相好也。其志深之上。相交遺恨。訖。每事期明春。謹言。

十二月廿三日

主 税 頭

此の往來の文體は、鎌倉期に入つては、幕府公用文書の體とさへなつたが、後世の「候文」は此の系統に出たものである。



昭和拾年一月五日印  
昭和拾年一月十日發行



發行所

東京牛込早稻田

敬文堂書店

電話牛込(34)五七三五番  
振替東京二三七三七番

定價金貳圓

著者 佐藤仁之助

發行者 竹内淳郎

印刷者 加藤鎌次郎

東京市牛込區早稻田鶴卷町四三六  
東京市神田區猿樂町二ノ一三



21-193

3/2



855  
108



終